

タイトル	ケルト研究の現在・過去・これから : 近年の考古学 ，言語学，考古遺伝学の動向から
著者	常見，信代； TSUNEMI， Nobuyo
引用	北海学園大学人文論集(68)： 39-120
発行日	2020-03-31

ケルト研究の現在・過去・これから

— 近年の考古学，言語学，考古遺伝学の動向から —

常 見 信 代

序 研究史の現在と今後

2015年は、ケルト研究の「いまとこれから」を象徴する動きのあった年と言える。動きの一つは、2015年から2016年にロンドンの大英博物館とエディンバラの国立スコットランド博物館の共催で「ケルト人：芸術とアイデンティティ」と題して開催された展示である¹。イギリスで「ケルト展」が開かれるのは40年ぶりであるから、これだけで話題性は十分であるが、それ以上に注目されたのは、開催前から展示責任者である博物館主任研究員の二人が積極的にメディアに登場して、「ケルト人が…アイルランドやスコットランドにも来て、現在もとどまっている…といった、お考えをお持ちの人たちにぜひ来ていただきたい。…(展示を通して) こうした先入観に終止符を打ちたい」(大英博物館 J.ファーリー)とか「売店のお土産に並んでいる復刻されたケルト美術は、〔古代のケルト人の時代ではなく〕紀元後一千年紀にブリテンとアイルランドにあった様々な様式の融合である」(スコットランド国立博物館 F.ハンター)などと発言したからである²。

実際に蓋を開けてみるとそのとおりで、たとえば、展示物そのものは、イギリスの「ケルトの至宝」と評される「バタシーの盾」のような渦巻や

¹ 'Celts: art and identity' 2015年9月から翌年1月まで大英博物館で、2016年3月から9月までは国立スコットランド博物館で開催された。展示会図録は、Farley, & Hunter, 2015.

² 'British Museum explores Celt culture', *BBC NEWS* (9 July 2015).

巴の文様など「ケルト文様」が施された、おなじみの品々であり、これまでのケルト展や一般向けのケルト概説書では「ケルト芸術」(Celtic Arts)とか「ケルト文化」(Celtic Culture)のラベルが貼られてきたものである。ところが、今回の展示には'Celtic'の語はいっさい使われず、代わって'Irish Arts'や'Insular Arts'など、制作された土地の名称で記すだけである。そのため、一般のケルト愛好家やメディアから戸惑いや批判の声があがり³、責任者が博物館の趣旨説明を繰り返すことになったわけである⁴。

しかし、今回の「ケルト展」は、博物館の独断や偏見に基づいた企画ではない。先に紹介したJ.ファーリーのいう「先入観」とは、西ヨーロッパで16世紀に始まり18-19世紀にはほぼ定式化され、20世紀に一般化された通説を指す。その内容を要約すれば、「ケルト人とは、ハルシュタットやラ・テーヌのある中央ヨーロッパをホームランドとし、紀元前6世紀頃から渦巻きや巴文様などが施された物質文化(ケルト美術)を創造し、ケルト語を話す民族で、彼らがヨーロッパを広く移住してギリシア人やローマ人に記録されるとともに、各地にケルト語とケルト文化を広めた」という内容である。この解釈が重要なのは、人(民族)と文化と言語が等記号で結ばれ、ケルト語が確認される場所、あるいはラ・テーヌの人工遺物などが見つかった場所は、ケルト人が存在した、あるいは、移住したところと解釈された点にある⁵。ウェールズ人やアイルランド人あるいはス

³ *The Guardian*, July 10, 2015; *The Guardian*, September 22, 2015.

⁴ Julia Farley, 'Who were the Celts?', Curator's Corner (13 October 2015) <https://blog.britishmuseum.org/who-were-the-celts/>; Society of Antiquaries of Scotlandの主催でエディンバラで開催中の6月にHunterが講演。「ケルト展」終了後の10月27日にはFarleyとHunterの二人が講演し、展示の趣旨を説明するとともにYouTubeにアップして公報に努めた。

⁵ 通説(旧説)の一般向け概説書の代表として現在も影響のあるのが、Powell 1980, pp. 45-49, 笹田訳 1990, pp. 61-78; Rankin, 1987, pp. 9-13; Megaw 2001, pp. 9-24. 邦語訳のある概説書の代表として、Cunliffe, 1992, pp. 16-17, 蔵持訳, 1998, pp. 16-17; James, 1993, pp. 110, 153-155, 井村監訳, 2000,

コットランド人が「ケルト人の子孫」と信じられてきたのは、彼らの言葉が言語学者によって「ケルト語」の一つとされ、美術史家らによって渦巻き模様のある「バタシーの盾」や『ケルズの書』などが、かつてのブリトン人やアイルランド人がケルト人であった証拠とされたからである。「ケルト展」を見たケルト愛好家の戸惑いや失望の原因は、ここにある。

ところが、この「先入観」に基づいた通説は、すでに1963年にJ. R. R. トルーキンのケルト研究者を前にした講演で次のような警告を受けていた。

‘Celtic’という用語は、魔法の袋みたいなもので、なんでも入るし、なんでも出てくる…。こんな驚くようなCelticの薄明（Celtic twilight, 曖昧さ）のもとでは、どんなことでも出来てしまうが、それではケルトの薄明は、神々の黄昏というよりも理性の黄昏になってしまう⁶。

トルーキンのいう「魔法の袋」の中身を具体的に教えてくれるのが、イギリスを代表する考古学者C.レンフルーである。1987年の著書で、「言語と芸術を同等に扱わないように」と注意を促して当時の通説を否定するとともに、同等視した結果として‘Celtic’の用語が現在でも次のように八とおりの意味で使われていると指摘した⁷。

pp.185-86, 258-261 ; Haywood, 2001, pp. 78-79, 84-85, 井村監訳, 2003, pp. 78-79, 84-85.

⁶ Tolkien, 1963, pp. 29-30. トルーキンの発言の背後にあったのが、1960年代に始まる「ケルトブーム」popular Celticismであった。詳しくは、Kent, 2002, pp. 209-210。言うまでもないが、‘Celtic Twilight’はイエイツ（W. B. Yeats）の作品名でもある。

⁷ Renfrew, 1987, pp. 214, 239. レンフルーは2013年の論文でも（p.208）‘Celtic’の八つの用例を同じように繰り返している。唯一の変更が2の用例に‘ethnonym’の語を追加したことで、これにより1と2の違いをいっそう明確にしている。なお、レンフルーの前著の邦語訳（1993, p.278）では、1, 2の‘people’が「民族」と訳されているが、レンフルーはケルト人を単一民族とは

1. [ギリシア人・] ローマ人にその名で呼ばれた人びと [他称]
2. 自分たちをその名で呼んでいた人びと [自称]
3. 現代の言語学者が定義する言語グループの名称[ケルト語派の諸語]
4. 考古学で定義される文化を包含したヨーロッパ中西部の文化複合体
5. 芸術の様式
6. 古代の著作に示された好戦的で不撓不屈な魂
7. 紀元後一千年紀にアイルランドで作成された装飾写本やその教会
8. 広い意味でのケルトの伝統や遺産として現代の音楽や歌謡, ときにはダンス

このような'Celtic'の曖昧性や多義性が本格的に批判されたのは1990年代の「ケルト論争」からで、S.ジェームズやJ.コリス、P.シムス・ウィリアムズら、いわゆる「ケルト懐疑派」によってである⁸。この結果、現在ではブリテンやアイルランドへの古代ケルト人移住説やケルト人単一民族、あるいはケルト人と言語と文化とを等記号で結ぶ解釈は、アカデミズムの世界では駆逐されたといっても過言ではない。要するに、今回の「ケルト展」は、ケルト懐疑派の研究成果を取り込んだ最初の一般向け企画であり、従来と同じ展示物を用いながら、その解釈は旧説とは違ったものになったのである⁹。旧説になじんだケルト愛好家らは不満を感じたであろうが、イギリスではすでにS.ジェームズやB.カンリフらが既刊の一般向け概説書を全面的に書き直している¹⁰。この動きは今後も続くであろう。

捉えていない。

⁸ 'Celtoscepticism'.この用語は、ウェールズの詩人 Robin Llywelin が考案したウェールズ語の'celtisceptig'をシムス・ウィリアムズ (1998, p.2) が英訳してケルト研究に適用し、それまでの通説を'Celtomania'、これに対する批判を'Celtoscepticism'と表したことに始まる。この用語を用いるに至った経緯について、Sims-Williams (2013) を参照されたい。

⁹ 今回の「ケルト展」の趣旨を Fernández-Götz (2016) は'New Celticism'と表している。

2015年のもう一つの動きが、「考古遺伝学」¹¹の研究グループによる二つの論文である。いずれも先史DNA¹²の解析によって、印欧諸語のヨーロッパへの拡散に関する従来の説に大幅な修正を迫る結果をもたらしたのである。DNA自体に言語を特定する遺伝情報はもちろんないが、遺伝子の分布を追跡すれば、人口集団の移住を証明でき、移住に伴う文化と言語の拡散も追跡できる、というのが「考古遺伝学」の前提である¹³。

ウェールズ語やアイルランド、スコットランドのゲール語などは、第二節で詳しく述べるように、相互の類似性から16世紀から18世紀に「ケル

¹⁰ S.ジェームズは註5であげた著書（1993；井村監訳、2000）のなかで、すでに当時の通説に疑問を呈していたが（p.21, 井村監訳 p.43）、「ケルト懐疑派」の立場から1999年にあらたに概説書 *The Atlantic Celts* を書いている。また、B.カンリフも、邦語訳はないが、一般書として人気のあった *The Ancient Celts*（1997）を2018年に全面的に書き直した。

¹¹ 「考古遺伝学」（archaeogenetics）とは、命名者である Renfrew（2000, pp. 3-12；2018, pp.4830-4832）によれば、分子遺伝学の分析方法を過去の時代に、特に先史時代に適用して人口集団の動きなどの解明を目指す新しい分野をいう。

¹² ‘ancient DNA’.わが国では「古代DNA」の訳が定着しているようであるが（キャンベル&ホフライター、2013；バルター、2016；デイヴィッド・ライク著、日向やよい訳、2018；泊次郎、2018）、日本語の「古代」にはギリシア・ローマ時代も含まれるのが一般的なため、「先史DNA」または「古DNA」が適切と考え、本稿では前者の訳語を用いる。

¹³ Reich, 2018a, pp. 121-21；日向訳、2018, p.186。ハーバード大学医学部大学院遺伝学教授D.ライクはこの分野の牽引者で、2013年に先史DNAの全遺伝情報の解析に特化した研究室をアメリカではじめて開設した。ライクによれば（2018a, p.xvi, 日向訳, p.17）、2010年に先史DNAから抽出したゲノムは5つだったのが、2017年8月現在この研究室は所有するヒトの先史ゲノムは3000以上という。ライクはこれを「先史DNA革命」と呼ぶ。2015年末までに発表されたこの分野の研究のほぼ半数はライクの研究室から出ている。また、2018年3月にこれら弟子たちの研究を総括する最初の著書を出版し、同年8月には日向やよい氏による邦語訳が出ている。ぜひ

ト語」(Celtic)と総称されるようになり、さらに、18-19世紀にはケルト語だけでなくヨーロッパやインド北部の言語には密接なつながりが認められることから、これらの言語はインド・ヨーロッパ語族(以下、印欧語族)という言語グループに分類されるようになった。この結果、歴史言語学の大きな課題となったのが、これほど広大な地域にわたって言語の均質化をもたらした印欧諸語の拡散過程を明らかにすることであり、そのためには、これらの印欧諸語に共通の祖先語つまり印欧祖語(PIE, Proto-Indo-European)の原郷(ホームランド)を明らかにすることであった。この問題は、ウェールズ語やゲール語など印欧語族のなかのケルト語派に括られる言語が、いつ、どこで印欧祖語から分岐したかという問題に直結するため、ケルト研究にとっても重要な問題である。

この問題について最近まで有力だったのが、先に紹介した考古学者C.レンフルーが提唱したアナトリア仮説である。これほど広大な地域で類似した言語が拡散したのは、印欧祖語を話す人口集団の大規模移住によるという説で、レンフルーが提唱した当時、ヨーロッパのほぼ全域にわたる大規模移住として知られていたのは、農耕やストーンヘンジのような巨石文化などの新石器文化を運んだ「最初の農耕民」‘First Farmer’の移住だけであり、これ以後の大規模移住の例は知られていなかった。このため、印欧祖語の原郷はアナトリアにあり、紀元前七千年紀から紀元前六千年紀に「最初の農耕民」がヨーロッパに運んだと提唱したのである¹⁴。

これに対抗するのが、印欧祖語の原郷を黒海・カスピ海の北部、現在のウクライナ地方やロシア南部のステップ地帯(以下、ポントス・カスピ海ステップ)とする説で、現在ではJ.マロリーやD.アンソニーがこの説の代表となっている(ステップ仮説)¹⁵。この説によれば、印欧語族に属する言

参照されたい。なお、ライクが出版直後にアメリカ哲学会で行った講演録(2018b)および泊次郎氏(2018)による邦語訳の書評は、この分野の理解に有益である。

¹⁴ Renfrew, 1987.特に ch.7, pp.145-177。

語の大多数には車輪や車軸など荷車に関する語彙が共通して認められ、考古学的な証拠から車輪や荷車が広まったのは前 4000 年以後か前 3500 年以後であることから、現在話されている印欧諸語は、最初の農耕民ではなく、荷車を使っていた集団、つまりポントス・カスピ海ステップで家畜化した馬と荷車という技術を重用した牧畜民ヤムナヤの言語の血を引いているという。ただし、アンソニーは、印欧祖語とヤムナヤ文化の拡散は、大規模な移住によるのではなく、大半が知識の伝播と模倣を通じて広がったと説明する¹⁶。

アナトリア仮説もステップ仮説も、考古学の遺跡や人工遺物の分布、あるいは後代の文字史料から得られる語彙の分析などを根拠としており、それに関する解釈の違いもあって決定的な説とはなりえなかった。ところが、2015 年の *Nature* に掲載された二つの論文は、ヨーロッパ各地の骨格標本から採取した先史 DNA の全遺伝情報の解析によって、中央ヨーロッパでは先史時代後期に大規模な移住が二回あり、これによって人口集団が大幅に入れ替わったことを明らかにしたのである。それによれば、一番目の移住者はアナトリア由来の遺伝子を持つ「最初の農耕民」であるが、中央ヨーロッパでは彼らの大半が新石器時代末期から青銅器時代初期にかけて（およそ紀元前三千年紀）ポントス・カスピ海ステップから縄目土石器 (Corded Ware) とともに移住したヤムナヤ由来の遺伝子を持つ集団によって置き換えられ、しかも、ヤムナヤ由来の遺伝子は、現在の中央ヨーロッパ北半の人びとに受け継がれているという¹⁷。つまり、これ以後に遺伝子

¹⁵ M.ギンブタスの提唱に始まり、年代や移動について J.マロリーや D.アンソニーらによって大幅に修正された。Gimbutas, 1956; Anthony, 1986, 2007 (特に ch.4, pp.59-82); Mallory, 1989, 2006 (with D. Q. Adams), 2013, 2016。

¹⁶ ステップ仮説は、クルガン仮説とも呼ばれる。クルガン (kurgan) とは、日本の古墳に似た墳丘墓で、もともとポントス・カスピ海ステップで車輪や荷車とともに死者を埋葬した墓地であるが、そのヨーロッパでの分布を追跡することによって印欧祖語の拡散過程を明らかにしようとした、ギンブタス (1956) に始まる用語。

構成に影響を与えるような大規模な移住はなかったという結論である¹⁸。したがって、印欧祖語をヨーロッパへ運んだのはステップ地帯の牧畜民の子孫になり、印欧祖語の拡散に関するアナトリア仮説は否定されたが、アンソニーのステップ仮説も、知識の伝播と模倣による拡散説から移住説へと修正を迫られることになった¹⁹。

「考古遺伝学」からの報告はさらに続き、2016年と2018年にはアイルランドとブリテンでもヤムナヤ由来の遺伝子を持つ集団の移住とそれによる人口集団の入れ替えが起き、その遺伝子構成が現代まで受け継がれたことを証明した。ただし、この集団は縄目文土器文化ではなく、鐘状の広口ビーカ（Bell Beaker, 以下鐘状ビーカ）とそれに関連する文化を持つての移住であった^{20, 21}。こうして、2015年を境に急速に進む先史 DNA 解析によっ

¹⁷ 2016年にD.ライクの研究室メンバーらが、ヤムナヤ自身も遺伝子的には先史時代と現在のアルメニアとイランの人びとに近く、これらの人びとが1対1の比率で混血してヤムナヤになったことを明らかにした。Lazaridis et al. pp. 419-424.

¹⁸ ユーラシア各地の101人の骨格標本から採取した先史DNAを解析したのがAllentoft et al. pp. 167-72。ドイツ、ハンガリー、チェコなど中央ヨーロッパの69人の骨格標本から採取した先史DNAを解析したのがHaak et al. pp. 207-11。Haakらによれば、ヤムナヤ由来の遺伝子は、縄目文土器とともに埋葬された人骨から採取したDNAの79%を、西方狩猟採取民が4%を、最初の農耕民が17%を占めている（p.10, Fig. 3）。

¹⁹ これらの研究指導に当たったD.ライクによれば、最初に印欧祖語を話した人びと、つまり、印欧祖語の究極の発祥地（原郷）は、コーカサス山脈の南の可能性が高いが、まだ解明されていないという。つまりステップ地帯のヤムナヤはどこから伝わった印欧祖語をヨーロッパに運んだことになり、ここが発祥地ではないという。Reich, 2018a, p. 120.

²⁰ 2016年にトリニティ・カレッジ（ダブリン）のL.M.カシディらにJ.マロリーも加わって、北アイルランドのベルファスト近郊に埋葬された新石器時代の女性と、同じく北アイルランドのアントリウム州沖のラスリン島で発見された鐘状ビーカとともに埋葬された3人の男性とから、それぞれ採取したDNAを解析して、遺伝子のうえで置換があったことを証明した。

図1 ポントス・カスピ海ステップからの移住行路



出典 Reich. 2018b, p. 48

て、前 2500 年頃までにブリテンを含めたヨーロッパの人口集団の遺伝子構成が、現在のそれと非常に似ていたことを明らかにした。もちろん、たとえば、ブリテンのようにアングロ・サクソン人やヴァイキングの移住などによってさまざまな集団が混ざりあったのは事実であるが、遺伝子構成に大きな変化がないのは、その後の移住者の大半が鐘状ビーカ文化に結びついた人びとと遺伝子構成が同じだったことを意味する。

このように、DNA 自体にはケルト人かアングロ・サクソン人かを識別する情報はないが^{s22}、先史 DNA の解析によって、ケルト諸語やゲルマン諸

Cassidy et al. pp. 368-373.

²¹ D.ライクの研究室メンバーである I.オラルデらに B.カンリフも加わって、ヨーロッパの新石器時代、銅器時代、青銅器時代の 400 人の骨格標本から抽出した全遺伝情報を解析して、ヤムナヤ由来の遺伝子を持つ集団が銅器時代に広口の鐘状ビーカとともに移住を続けたことを証明した。特にブリテンについて、アナトリア由来の遺伝子を持つ新石器時代人の 90%がヤムナヤ由来の遺伝子に置き換えられ、同じ比率が青銅器時代にも続き、人口集団の劇的な置換があったことを明らかにした。Olalde et al. 2018, pp. 190-196.

図 2 縄目文土器文化と鐘状ビーカー文化の拡散



縄目文土器文化
前 2800-前 2200/前 2050

鐘状ビーカー文化
前 2500-前 2050

出典 Haak et al. 2015, Extended Data Figure 3

● 図 1・2：縄目文土器文化圏の西端と鐘状ビーカー文化圏の西端は重なる。

語の祖先になる印欧祖語がヤムナヤ由来の遺伝子を持つ集団によって紀元前三千年紀にアイルランドやブリテンを含めた西方ヨーロッパへ伝えられたことは明らかになったと言える。この結果は、ケルト語の成立、つまり印欧祖語から、いつ、どこで分岐してケルト語（またはケルト祖語）が成立したかという問題に直結するから、この結果を言語学や考古学の側でどのように受けとめるかが注目される²³。とりわけ、言語学の J.コッホと考古学の B.カンリフの二人が 2009 年に立ち上げたプロジェクト「ケルト語は西から」論である。このテーマで二人が編者となって 2010 年から 2019 年までにさまざまな分野の研究者を集めて計四巻の論文集を刊行している²⁴。しかし、現在も続く先史 DNA 解析は、「ケルト語は西から」論とは

²² カシディおよびオラルデらの研究は、ヤムナヤ由来の遺伝子を持ってアイルランドやブリテンに移住した集団の 90%以上に、先史時代だけでなく今日の西ヨーロッパの印欧諸語の話者にほぼ共通して見られる Y 染色体ハプログループ R1b があることを明らかにした。Cassidy et al. 2016, Table 1 (p. 369); Olalde et al. 2018, pp. 190-91, Figure 3 (p. 193).

²³ 批判がないわけではない。例えば、2015 年の二本の論文について、特に印欧祖語の起源に関して、ロシアの言語学者と D.ライクを含めた研究グループとの間で考古学誌上で論争が展開された。Klejni et al. 2017, pp. 1-15.

相いれない結果を出しており、どのように折り合うのかが注目される。これについては、第一節で紹介したい²⁵。

以上がケルト研究の現在と今後を象徴する 2015 年の動きである。筆者はケルト研究の専門家でもなく、ケルト人を論じたことは一度もない。ただ、わが国では旧態依然とした内容のケルト概説書が一般向けに出版され続けている一方で、「ケルト人」と言えば、目くじらを立てて全否定する傾向もあり、これは、アイルランドやブリテンの古代や中世の歴史をかじるなかで、好ましいことではないと考えてきた。その原因の一つは、史料に基づいた研究史の丁寧な整理が行われていないためと考えている²⁶。イギリスのように、ケルト人に関する一般向けの概説書や博物館の催し物にも、研究史が反映されるべきなのである。

本稿では、C.レンフルーのあげた‘Celtic’の八つの用例が魔法の袋に入っていく過程を史料に基づいて検証し、「ケルト懐疑派」の解釈を紹介しながらどこに問題があるのかを考えたい。ただし、ケルト懐疑派は一枚岩ではない。その内容は以下の本論に譲るが、特に問題となるのがレンフルーのあげた‘Celtic’の用例の 3 以下の扱いである。これらはすべて 16 世紀以後に付け加えられた用例であるため、‘Celtic’と呼ぶのは「インチキ」であり（S.ジェームズ）、ケルト研究はケルト人の生きた古代に限定すべき（J.コリス）と主張する懐疑派もいる²⁷。確かにそのように考えることもできよう

²⁴ 副題が彼らの関心を示すとともに考古遺伝学への対応も伺われるが、*Nature* や *Science* など科学誌に発表される研究の大半が電子版で配信されるため、出版による研究発表との間にかなりの時差が生じているのも伺われる。なお、原聖氏（2012, pp. 16-19）が第一巻（2010）のカンリフによる巻頭論文を要約されている。コッホらの構想について邦語で読める唯一の文献である。

²⁵ 本稿 38-41 頁参照。

²⁶ 森野聡子氏、菱川英俊氏が史料に基づいて近代ケルト学の成立を論じている。森野聡子・菱川英俊, 2017, pp.5-16; 森野聡子, 2017, pp.17-26。

²⁷ James, 1999, ch.6, pp. 136-144; Collis, 2014, p. 291. 田中美穂氏（2017）もこの

が、筆者はケルト的なるものを「自分ごと」として受け入れていった過程もまた、ヨーロッパ近代史とりわけアイルランドやブリテンの近代史のまぎれもない一部であり、当時の文脈のなかで史料を読む必要があると考えてきた²⁸。そこで、以下では「古代のケルト人」、「中世のケルト人」、「近代のケルト人」、「現代のケルト人」をテーマに基礎的な史料とそれをめぐる研究史を紹介したい。

1. 古代のケルト人

ケルト人とは「誰か」、「いつ、どこにいたのか」という問題に迫る最も基本的な方法は、ケルト人自身が書き記した記録から探る方法である。もう一つは、これらの著作や碑文に記された地名や固有名詞など言語の分析からケルト人の分布、所在地を明らかにする方法である。さらに、考古学から、つまり遺跡や人工遺物からケルト人に特有と言える物証を分析して、彼らの物質文化を明らかにする方法もある²⁹。これらの方法に加えて、近年、先史DNAの解析によって文字のない時代の人口集団の移動を追跡する方法があることは、すでに述べたとおりである。この節では、第一の方

立場に近いようである。なお、R.カールは、この300年に及ぶケルト人の起源探しは、ありえないものを探しているようなもので、もっと重要な問題に集中すべきと主張する。Karl, 2010, p. 39.

²⁸ 「ケルト懐疑派」の急先鋒にあげられがちなJ.コリスであるが、教師としては、「指導するにあたっては、研究史をケルト研究の重要かつ不可欠の部分として教えるべきだ」と主張する。Collis, 2017, p. 60.なお、コリスの2003年の著書は古代から現代までのケルト人に関する史料をさまざまな角度から検証した名著であり、単にケルト研究としてだけでなくブリテン諸島史の一つとして読むべきである。

²⁹ それぞれ理由を述べた上で、考古学者 Collis (2017, pp.62-63) はケルト研究は第一の方法に限定すべきと主張し、Simus-Williams (2017a, pp. 354-356) は第二の方法を主張する。

法を中心にケルト人についてわかること、わからないことを検証したい。

1) 記録された最初期のケルト人

ケルト人をめぐる問題の一つは、古代の著作に記された「ケルト人」（ケルトイ：Κελτοί, Keltoi；ケルタエ：Celtae）という呼び名がケルト人自身から始まった呼び名か、それともギリシア人やローマ人らが名付けた呼び名か、つまり他称か自称かという問題である（レンフルーの用例の1, 2）。これについて、C.レンフルーやB.カンリフは他称説に立ち、J.コッホは一貫して自称説を採るなど現在の研究者の間でも意見が分かれる³⁰。これは、ケルト人自身の書き記した史料が碑文を除くと紀元前1世紀末まで伝わっていないため、他称としてのケルト人しかわからないからである。

この問題についてたびたび引用されるのが、カエサルの『ガリア戦記』（前52-前51年頃）の冒頭部分で、ガリア中央部の住民は「ケルト人の言葉でCeltae, われわれの言葉〔ラテン語〕ではGalli（ガリア人）」という記述である。カエサルは、ケルト人という呼び名はケルト人の自称であると言っているのである³¹。しかし、この呼び名が自称として用いられた例が現存史料で知られるのは、非常にわずかで、しかも、すべてカエサル以後である。ガリアやイベリア半島の大半がローマの支配下に入り、その繁栄に浴するようになってからである³²。したがって、それ以前のケルト人に関して、今日に伝わっている事柄はもっぱらギリシア人やローマ人の目を通して見た、あるいは耳を通して聞いた、ケルト人である。古代のケルト人を検証する際に、この点は重要である。

ケルト人が現存史料に現れるのは前6世紀から前5世紀で、ミレトスの

³⁰ Renfrew, 1987, p. 223; Renfrew, 2013, p. 207; Cunliffe, 2018, pp. 3-4; Koch, 2014, p. 8. コッホによれば、これらの語は印欧祖語から分岐した、ケルト祖語であり、大西洋沿岸交易圏の人びとが自称したという。

³¹ Caesar, I. 1, pp. 2-3.

³² 後述 44-49 頁参照。

ヘカタイオスとハリカルナッソスのヘロドトスの著作からである。しかし、この二人は、ケルト人を正面から論じたわけではない。たまたまケルト人の居住する土地に触れただけであり、その内容はきわめて曖昧である。これが19世紀、20世紀のケルト研究に混乱をもたらす一因になる。

1-1) ヘカタイオス

ヘカタイオスの著作（前5世紀初め）そのものは伝わっていない。彼がヨーロッパの地理とエジプトを含むアジアの地理とを論じたとされる著作は、295の断片が後530年頃にビザンティンのステファヌスの編纂した『民族誌』（*Ethnica*）のなかに取り込まれ、その三か所でケルト人への言及がある³³。しかし、『民族誌』は地名や住民集団の名称などを簡単に羅列しただけであり、ケルト人がどのような文脈で語られたのかはわからない。

『民族誌』のなかでケルト人に言及しているのは次の三項目である³⁴。

- i) Nárbon: ケルト人の交易場であり、ケルト人のポリス³⁵
- ii) Massalía: リグリア人のポリス、その近くにケルト人の土地 (Keltikē)、フォカイア人の植民市
- iii) Nyrax: ケルト人のポリス

ケルト人が存在するとされる上記三か所のなかで、ナルボーン（以下、ナルボンヌ）とナイラックスについては、次のような問題がある。まず、ナルボンヌについてJ.コリスは、ステファヌス編の『民族誌』には上記の引用部分に続いてストラボンとマルキアヌスへの言及があること、また、

³³ ステファヌスによる転写について、詳しくは Braun, 2004, pp. 290-294.

³⁴ *Stephani Byzantii Ethnica*. Vol. 3, Nárbon: 13 (p. 365), Massalía: 89 (p. 274), Nyrax: 82 (p. 397).

³⁵ 邦語訳（岩波文庫）では、ポリスは「国」、ケルト人は「ケルト民族」と訳されているが、Celestino and López-Ruiz (2016, p.28) はヘカタイオスが同時代のギリシアのポリスを念頭に置いていたわけではないと否定する。また、単一民族と見なせるかは、本稿の課題である。

ヘカタイオスの時代の少し前にマッサリア（以下マルセイユ）のギリシア人（フォカイア人）舟乗りのために書かれた「マッサリア沿岸案内」には、ナルボンヌ(Naro civitas)はイベリア人の居住領域にあること、を根拠に³⁶、この記述はヘカタイオス自身の記述ではなく、ストラボンからの引用であろうと解釈する³⁷。ただし、「マッサリア沿岸案内」は原文も写本も伝わっておらず、紀元後4世紀半ばのアウィエヌスによるラテン語詩 *Ora Maritima* 『沿岸にて』のなかに取り込まれているだけである³⁸。しかも、アウィエヌスは、参照した著者としてヘカタイオスと次に紹介するヘロドトスの名前をあげているから（42行、49行）、彼らの著作の記述内容に合わせた可能性もある³⁹。要するに、コリスが典拠とする「マッサリア沿岸案内」も、ヘカタイオスの例と同様に後代の手が入っている可能性を否定できないのである⁴⁰。

³⁶ 'Massaliote Periplus', lines 575-585.ペリプルスとは、港や沿岸の陸標、目印をおおよその距離とともに記した航行手引書であるが、そこに、さまざまな情報が加えられた。詳しくは Cunliffe. 2017, pp. 68, 282-288。本稿では、著作名などについては、マッサリアのように当時の名称を用いる。

³⁷ Collis, 2003, pp. 126-127, 174-75; 2014, p. 302; 2017, pp. 63-64; Sims-Williams 2017, p. 430.ナルボンヌにローマ人の植民市が築かれるのは紀元前118年であり、ストラボンの時代の'Keltike'（ケルト人領域）はエスニシティの意味よりも行政上あるいは地理上の意味で用いられていた可能性がある。

³⁸ *Ora Maritima*. 原文および翻訳は、Murphy (1977)。アウィエヌス (Rufius Festus Avienus) は北アフリカで地方総督 (proconsul) を務めた経歴を持つとともに、詩人としてギリシア語詩のラテン語への翻訳を手がけた。詳しくは Freeman 2001, pp. 28-32。

³⁹ たとえば、*Ora Maritima* の130行-135行に、ケルト人に追放されてリグリア人が荒地に逃げ込んだとあり、この記述を Tierney (1960, pp.193-194) および Rankin (1987, pp.2-7) はケルト人に関する最初の史料と位置づけるが、次に紹介するヘロドトスのマッサリアに関する記述に類似している。なお、ティエルニの論文は、ケルト人に言及した古代の著作の原文をほぼ網羅した史料解題であり、その解釈には異論もあるが (Nash, 1976)、現在でも高く評価されている。

次にナイラックスについて、その場所は現在でも特定されていない。ところが、19世紀中葉にオーストリアのハルシュタットで遺跡が発掘されると、綴りの類似からかナイラックスはオーストリアのノリクム (Noricum) のノレイア (Noreia) にあたると解釈された。その結果、ヘカタイオスの言及は、ケルト人とこの地域のハルシュタット文化とを一体化して捉える有力な論拠となったのである⁴¹。

以上のように、ヘカタイオスの言及とされる記述のなかで、問題がないのは、マルセイユだけと言える⁴²。ヘカタイオスは、イオニアのミレトスの出身であるが、前600年頃にマルセイユに植民市を築いたギリシア人(フォカイア人)も同じイオニアの出身であるから、マッサリアについての

⁴⁰ Simus-Williams (2016, p.24) はアウイェヌスの手が入った可能性があるとしてケルト関連史料としての価値を否定するが、他方でこの史料はマルセイユの町やローヌ川や大西洋岸南西のタルテッソスに到る沿岸について非常に詳細なことから、これらの部分はマルセイユで書かれた実際のペリプルスに基づいているとされる。詳しくは Roller, 2006, pp. 8-9; Cunliffe, 2017, pp. 306-307。ちなみにマルセイユのペリプルスにはブリテンが「アルビオン」(Albion)、アイルランドが「イエルネ」(Ierne) の名前で記されている (*Ora Maritima*, lines 90-115)。これがアイルランド、ブリテンの記録された最初の名称である。なお、マルセイユの舟乗りが航行したのは 'Oestrymnis' (ブルターニュ半島) までで、そこから先のブリテンなどとの交易は「皮舟」に乗って地元民が行い、それをギリシア人に渡していたようである。おそらく、「イエルネ」「アルビオン」は地元民の間での呼称であろう。

⁴¹ 近年でも Powell (1980, pp.13, 46) はこの説を採る。Simus-Williams (2016, pp.8-9) は、'Nyrax'はサルディニア語の'nurāghe' (岩) に由来する、サルジニアの地名と考える。

⁴² ヘロドトスもマルセイユの内陸部にリグリア人が住んでいると書き、フォカイア人は海岸部にいるような含みで書いている (V. 9, pp.8-9)。ただし、ヘロドトスがヘカタイオスを読んでいることは確かであるから (I. 143; V. 36; V. 124-25; V. 144-145; VI. 137), V. 9の記述は、ヘカタイオスからの引用の可能性もある。

情報を得ていたと推測される。

1-2) ヘロドトス

ヘロドトスは、著書『歴史』（前5世紀後半）の二か所でケルト人に言及している。その内容を理解するには、ケルト人を取り上げた文脈が重要である。

i) 第2巻33節

この巻でのヘロドトスの関心は、ケルト人そのものではなく、「ナイル川の水源」がわからないために、その全長をいかに測定するかという問題にある。その解決方法として、ナイル川とイストロス川（以下、ドナウ川）は「同じくらいの長さ」であるという前提のもとで⁴³、ドナウ川の全長を「既知の事実」とし、そこから「未知のこと」すなわちナイル川の全長を推測しようとした⁴⁴。つまり、ヘロドトスにとって問題はあくまでも「ナイル川の全長」であり、それを知るために「ドナウ川の水源」からその河口までを説明し、その関連でケルト人に言及したのである。

ナイル川はドナウ川と同じ位の距離から発していると思われる。ドナウ川は、ケルト人の土地とピレネーの町から発し、ヨーロッパを真二つに割って流れているからである。ケルト人は、「ヘラクレスの柱」〔現在のジブラルタル海峡〕の向うに住み、ヨーロッパの最西端に住むキュネテス人（Kunēsioi, Kunētes）と境を接している。

ii) 第4巻49節

この巻では、ペルシア王ダレイオスのスキタイ遠征が詳しく論じられる。

⁴³ ヘロドトスは、ヨーロッパとアフリカ（リビア）が地中海をはさんで左右対称で、ドナウ川はヨーロッパを西から東へ、ナイル川はアフリカを西から東へ流れていると考えていたようである。Collis, 2003, p. 127.

⁴⁴ 『歴史』第2巻は、34節までがおもにエジプトの地理上の問題が検討され、特に28節からはナイル川の全長が議論される。

特 47 節からはスキタイ人の生活様式の背景に多数の河川があることをあげ、ドナウ川を「われわれの知る限り世界最大の川」と称えるとともにいかに多くの河川がドナウ川に合流するかを縷々述べるなかで、次のようにケルト人に言及する。

…それというのもドナウ川はヨーロッパ全土を貫流する川であるからで、ヨーロッパの住民のなかではキュネテス人について最西端に住むケルト人に発し、全ヨーロッパを貫流してスキタイの脇腹に注いでいる。

要するに、ヘロドトスによれば、i) ドナウ川の水源はケルト人の土地とピレネーにあり、ii) ケルト人はイベリア半島最西端のキュネテス人と隣り合っていることになる。この記述については、いくらでも疑問がわく。特に問題となるのは、ドナウ川の水源がピレネーにあるという記述である。このピレネーを常識的にピレネー山脈と考えれば、ヘロドトスは間違っている。また、このピレネーをピレネー山脈の東端でマルセイユに近いピレネー港と解釈する研究者もいるが⁴⁵、これもドナウ川の水源とはほど遠い。さらに、上記 i) のケルト人と ii) のケルト人とは面につながった同じ集団か、あるいは別々の集団かも明確でない。

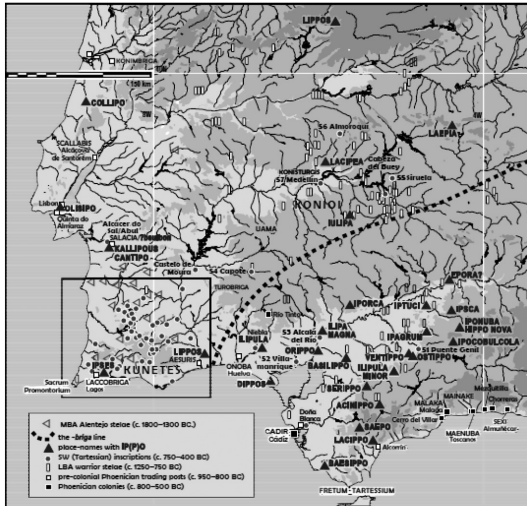
キュネテス人の隣人のケルト人をめぐっても、キュネテス人は現在のポルトガルの西南端にいた集団であるから、北隣りか東隣りかで J. コッホと P. シムス・ウィリアムズの意見が分かれる(図 3)。特にキュネテス人の居住区域には石にフェニキア文字を刻んだ 100 近い碑文が残され、コッホは

⁴⁵ Rankin, 1987, pp. 3, 20; Oppenheimer, 2006, p. 32; Oppenheimer, 2010, p. 128. ともにピレネー港を後の Emporia を指すとしているが、ローマの歴史家リウイウスは前 2 世紀初めの執政官マルクス・ポリキウスの遠征に触れて、ピレネー港 'portus Pyreneai' と 'Emporia' を別々の港としている。Livy, XXXIII. 8, pp. 452-453.

図3 初期ケルト人の関係地名



出典：Sims-Williams (2017b), p. 423.



出典 *Celtic from the West 3: Atlantic Europe in the Metal Ages*, p. 451.

一貫してそこに刻まれた言語(タルテッソス語)をケルト語と断定し、「ケルト人の物語はタルテッソスに始まる」と主張してきた。さらに2014年からはヘロドトスのいう「キュネテス人の隣」を東隣りと解釈して、ケルト人がタルテッソスの中心にあたるウエルバやフェニキア人の拠点だったカディスに存在したと主張する。「ケルト語は西から」論の重要な論拠であるが、証明が困難な主張でもある⁴⁶。

このような混乱の原因は、ヘロドトスの地理の知識が曖昧なことにある。しかも、重要なのは、ヘロドトス自身が「ヨーロッパの西方については、確かなことは話せない。…ヨーロッパの彼方に海〔大西洋〕があることを、これを実見した者の口から聞くことができないでいる」と認識不足を認めていることである。ヘロドトスにとってヨーロッパの西方はアフリカと同様に「未知のこと」であり、直接に見聞したのではなく不確かな情報をまた聞きしたと、みずから白状しているのである⁴⁷。これはヘロドトスだけではない。アリストテレス(前384-前322)も、「ピレネー山脈から、ドナウ川とタルテッソス川〔現在のイベリア半島南西のグアダルキビル川〕が流れ出ている」と書いているから⁴⁸、ドナウ川の水源についてはギリシア人の間で誤った情報が流布していたと考えられる。

そもそもドナウ川とライン川の水源が現存史料に正しく記されたのは、ストラボン(前64年頃-後21年)の『地理書』からである。ストラボンは水源地帯に到達した例として、ティベリウスのゲルマン平定(前16年-前15年)をあげ、ティベリウスがケルト人居住領域(Κελτικῆς, Keliké)からドナウ川とライン川の水源の間にあるボーデン湖畔へ出て、そこから一日の行程でドナウ川の水源に到達したと書いている⁴⁹。ストラボンによれ

⁴⁶ Koch, 2010, p. 186; Koch, 2014, pp. 6-7; Koch, 2019, pp. 68-69. Sims-Williams (2016, pp. 13-14)は一貫してタルテッソス碑文ケルト語説を否定する。

⁴⁷ Herodotus, III. 115, pp. 140-141; V. 9, pp. 8-9.

⁴⁸ Aristotle, *Meteorologica*, I. 13 (350b), pp. 96-97.

⁴⁹ Strabo, VII. 1-5, pp. 164-165.

ば、水源地帯はケルト人居住地ではなかった意味にとれるが、この周辺は、前4世紀にケルト人が移動した地域でもあり、ケルト人の存在は否定できない（図6）。問題はここがケルト人のホームランドかどうかである⁵⁰。

以上のように、ケルト人に関するヘロドトスの言及も、ヘカタイオスと同様に多くの問題を含むものであった。それにもかかわらず、これらの言及は、19世紀末から20世紀初めには検証もなしに、ライン川とドナウ川の上流はケルト人のホームランドの根拠とされ、ケルト人とハルシュッタトやラ・テーヌの文化とが等号で結びつけられることになる。

以上がケルト人に関する最初期（前6世紀-前5世紀）の言及である。これらの記述から、この時期の「ケルト人とは」、「いつ、どこにいたか」をまとめておく。まず後者の問題について、最初期の記録に記されたケルト人は、ヘカタイオスによればマッサリアの内陸部にいたことになるが、この地域では、後の時代であるが、ギリシア文字で刻まれたケルト語碑文が発見されており⁵¹、また、前4世紀頃からのケルト人の祭殿跡が多数発掘されているから（図4）、ケルト人の存在は確かであろう。また、ヘカタイオスもヘロドトスも言及していないが、彼らと同時期に刻まれたと推定されるレポント語碑文が、イタリア北部で少数ではあるが発見されている⁵²。レポント語は、ラテン語が浸透する以前にこの地方で話されていた言語であり、現代の研究者により印欧語族のケルト語派に分類される⁵³。

このように、最初期に確認されるケルト人は、その存在がヨーロッパの南西部にかたよっているが、これは著作や碑文など文字史料がこの地域に残されているからであり、こうした史料がないところにケルト人が存在しなかったとは、もちろん言えない。たとえば、ガリア北西部のケルト人に

⁵⁰ 後述、36-42頁。

⁵¹ Hoz, 2007, p. 14.

⁵² Koch, 2014, pp. 12-13; Sims-Williams, 2016, pp. 23-24; Sims-Williams, 2017b, pp. 433-434; 原聖, 2007, pp.113-114。

⁵³ Mallory, 2006, p. 16; Sims-Williams, 2017a, p. 359.

ついて文字史料はいっさいないが、前320年代にマルセイユの出身でブリテン島を周航したギリシア人のピュテアスがブリテン島の対岸のガリア北西部を‘Keltikē’と呼んだと伝えられている⁵⁴。したがって、前4世紀後半には、マルセイユの内陸部からガリア北西部までが‘Keltikē’と認識されていたと言えるかもしれない。また、ピュテアスは、ブリテンを‘Prettanikē’あるいは‘Brettanikē’、アイルランドを‘Ierne’と呼び、‘Keltikē’とは呼んでいない⁵⁵。ピュテアスによれば、‘Keltikē’は、あくまでもヨーロッパの大陸部についての呼称である。ただし、ピュテアスの著作もまた、現在には伝わらず、ストラボンらの引用から伺うしかないため、断言はできない。このように、最初期の史料はあまりにも少なく、ケルト人が「どこに」いたかは

⁵⁴ Strabo, I. 4-2 (pp. 234-235). フェニキアに代わって前6世紀にマルセイユのギリシア人がイベリア半島西岸の錫などの取引に参入したが、これもカルタゴの海上支配によって締め出されることになった。そこで、マルセイユの商人ピュテアスは、新たなルートでブルターニュ半島やブリテンの鉱山と交易すべく、陸路からジロンド川河口に出てブルターニュ半島経由でブリテン島に上陸し、南西部のコンウォール地方の錫の採掘場などからアイリッシュ海を北上してトゥーレ島（おそらくアイスランド）、オークニー諸島などに到達、ブリテン島の東海岸を南下してバルト海経由で帰郷したとされる。詳しくは Cunliffe, 2002; 2017, pp. 287-328。

⁵⁵ 「マッサリア・ベリプルス」では、ブリテンはアルピオンであったが、ピュテアスの時代にはアルピオンは使われなくなったようである。プ(ブ)レタニケはラテン語では‘Britannia’、イエルネは‘Hibernia’と表記された。いずれも古代だけでなく中世を通してブリテン、アイルランドのラテン語名として使われ続ける。他方でアルピオンは、大プリニウスの『博物誌』(IV. 16)を通して8世紀にベーダの『教会史』(I. 1)に「ブリテンのいにしへの名称」と記されて知られるところとなり、10世紀にはブリテンの意味でゲール語‘Alba’となり、スコットランド王国と王の名称に、さらに、教会改革期のイングランドでも王の称号に「ブリテンの王」に代わって「アルピオンの王」が付されるようになる。常見信代, 2017, pp.33-34。イングランド王の称号の変化は、その背景にノーサンブリアをめぐるスコットランド王との対立がある。

推測を重ねざるをえないのである。

次の問題は「ケルト人」はどのような意味で使われたかである。これについて検討できる史料はヘロドトスの記述しかない。それによれば、ヘロドトスにとってケルト人は、東のスキタイ人、南のリビア人（アフリカ人）と同じくギリシア世界の「圏外」にいる人であり、西にいる「未知の人」として好奇心の対象であったと言える。しかし、ヘロドトスの記述にはケルト人を野蛮人扱いする表現は見られない。この点は重要である。

2) 前4世紀—前1世紀のケルト人

ケルト人に関する史料が増すのは前4世紀からで、ギリシア人そしてローマ人の世界の「圏外」にいた彼らが、ローマ市を占領あるいはギリシアの聖地デルフィを掠奪するなど、襲撃者として、移住者として、あるいは傭兵としてギリシア人やローマ人の「圏内」に入ってからである。それとともに、ケルト人を野蛮人扱いする記述が現れてくる。

あらかじめ、この時期の史料について整理しておく。なお、前4世紀以後のラテン語史料にはガリア人、ギリシア語史料にはガラタイ人と呼ばれることもあるが、これについては後述し、ここではケルト人の呼称を使う。

表1は、ケルト人に言及した主要な著作とその内容をまとめたものである。この表から注目される第一は、ケルト人の襲撃や移動に関する話の多くが、出来事のかなり後になって書かれたことである。デルフィ攻撃（前279年）に至っては2世紀後半のパウサニアスがそのおもな史料となっている。もちろん、こうした出来事は、ローマ人やギリシア人にとって拭い去ることの出来ない歴史の汚点であったから、「国難」として語り継がれてきたであろうが⁵⁶、時間の経過のなかで「尾ひれ」がついていった可能性も

⁵⁶ リウィウスによれば（Livy, V. 52）、ローマ市では神々が守ってくれたことに感謝して元老院の決議で占領された日にカピトリウム競技祭を開催することを決定した。また、表1のパウサニアスの項にあるように、ケルト（ガラタイ）軍撃破を記念した彫刻がアテネのパルテノン神殿南壁にあったという。

ある。

たとえば、これらの出来事の同時代人と言えるのは、プラトンであり、アリストテレスであり、ポリュビオスであるが、最も近くで見聞したのはポリュビオスであろう⁵⁷。表1のポリュビオス1にあるように、彼はケルト人がポー川流域から一掃され、イタリア北部がローマ化されていくのを目撃しており、ケルト人のイタリア侵攻の最終局面の同時代人と言える。これに対してポリュビオスから150年近く後のリウィウスは、ガリア人の襲撃によって「ローマ市が大火となった際に多くが失われたため…建国からガリア人のローマ襲撃までの歴史が曖昧である」と正直に語っている(VI.1)。この結果、史料が欠けている部分はポリュビオスら先人の著作で補うとともに、随所で伝承や創作話を織り交ぜてドラマティックな物語に仕立てられている。これが読者に受けたのは、古代も現代も同じである⁵⁸。

2-1) 記録されたケルト人

表1にあげた著者のなかで、実際にケルト人領域に足を踏み入れたことが明らかなのは、ポリュビオスとポセイドニオスそしてカエサルである。ディオドロスやストラボン、リウィウスらがケルト人を論じているが、その内容から、彼らがポリュビオスやポセイドニオスを、そして、おそらく

⁵⁷ ポリュビオスは、ギリシアのメガロポリス生まれ。第三次マケドニア戦争で人質となってローマに移送されてスキピオの保護を受け、ローマにとどまり、スキピオに同行してポエニ戦争に従軍した。前146年にギリシアに戻ると、ローマの地中海世界制覇の歴史を『歴史40巻』にまとめた。ただし、現存するのは第5巻までで、それ以外は著者自身による摘要などである。そのIII.59でポリュビオスは、「これまでに書かれた著作の誤りを正し、遠隔の土地についてギリシア人に正確に伝えるために」各地を訪れたと記している(表1参照)。歴史家ポリュビオスについて McGing, 2010, pp. 51-94。

⁵⁸ たとえばポー川流域への進出について、妻の浮気相手をエトルリア人の夫がおびき出した話や(Livy, V. 33)、増えすぎた人口を減らすために大勢のケルト人にお告げに従って新天地にたどり着くように命じたという話が語られる(V. 34)。邦語訳のあるケルト概説書にもよく引用される話である。パウエル, p.108; ジェームズ, pp.51-52; カンリフ, pp.213-214。

表1 ケルト人に言及したおもな著作とその概要（前4世紀-後3世紀）

<p>プラトン（前429-前347年）、<i>Laws</i>, 1.637d-e:「スキタイ人、ペルシア人、カルタゴ人、ケルト人、イベリア人、トラキア人、スパルタ人はすべて好戦的^{*1}で、（ワインの）大酒呑み^{*2}」</p>
<p>アリストテレス（前384-前322年）、<i>Politics</i>. 1229b:「ケルト人について言われるように、総じて蛮族の勇猛さは血気^{*1}と見分けがつかないものである」 1269b:「ケルト人の男性は女性には目もくれず、むしろ男性同士を好む」 1336a:「子供たちを鍛えるために、厳しい気候のなかで薄着にさせる」</p>
<p>エポロス（前405年頃-前330年）: 著作は伝わらず、ストラボン（前64年頃-後21年）が引用 IV.4.6:「太り過ぎたケルト人の若者は、罰として標準の長さの腰帯で締め付けられる」</p>
<p>ポリュビオス（前204年頃-前122年）、<i>The Histories</i>, III-48, III-59:「アフリカ、イベリア、ガリアの各地を旅し、さらに大西洋沿岸の航海にも出たことがある」</p> <p>1. ケルト人のイタリア侵攻・ローマ襲撃（要約） II.17-35: 前400年頃ガリア人のポー川流域進出、アリア河畔の戦い・「2か月つづいたローマ占領」（前390年説/387年説）、前295年センチヌムの戦い、前282年和平協議、前225年テラモン近郊の戦い（ケルト軍殲滅）、これ以後ローマ軍が攻勢でガリア部族領へ侵攻、前191年にポイイ族による最後の反乱の鎮圧。</p> <p>2. 恐怖 II.7.5-6; II.19.3-4:「ケルト人は強欲で、信用できず、隣人や同盟者の物も自分の物にする」 II.19.4; II.32.7-8, III.70.4, III.78.2:「ケルト人は大酒呑み^{*2}で、気紛れ」 II.28, 30:「テラモン近郊の戦い」「インスプレス族とポイイ族はズボンと上着で体を覆って戦闘に臨んだが、ガエサティ族は武名を尊ぶ勇猛な部族であったから服を脱ぎ捨てて裸になり、武器だけを持って最前列に立った^{*3}」 II.28:「テラモン近郊の戦いで執政官ガイウスは敵の手にかかって命を落とし、その首^{*4}はケルト人の王たちのもとへ届けられた」 III.67:「ケルト人戦士はローマ軍と行動をともにしていたが、ケルト人戦士だけが…夜の大半を寝ずに夜明け前にローマ兵に襲いかかって多数を殺害し、死体の首を切り取って^{*4}カルタゴ陣営のもとに駆け込んだ」</p> <p>3. 戦闘・生活 II.15 [ポー川流域へ移住したケルト人について]: <u>住民の数の多さ^{*5}、体格の大きさ^{*6}と美しさ</u>、さらには<u>戦場における勇敢さ^{*7}</u>については、彼らの行動そのものがはっきりと教えてくれる II.17:「彼らは藁を寝床とし、獣肉を食らい、習うことといえばただ戦争と農作の技だけの簡素な生活を送っていた。彼らの間では子分や取り巻きを最も多く抱えているという評判を得た者が、最大の威信と権力を手に入れたか</p>

ら、徒党を組むことには、なににもまして熱心だった」

II.28:「統制のとれたケルト軍の陣形は、見る者を威圧したばかりか、実際にも有効な戦術だった」

II.29:「ケルト人の大軍勢の威容と轟音には圧倒されてしまった。なぜならケルト軍には角笛吹きとラッパ手が数多くいて、しかも、それに合わせて全軍がいっせいにときの声をあげたので。…加えて前線に立つ裸の兵士たち^{*3}の姿と動きは、並外れた体格^{*6}と活気によって、見る者を威圧した。前陣に並ぶ戦士たちは全員が黄金の首飾りと腕輪^{*8}で身を飾っていた」

4. ローマ化を目撃

II.35:「私は、その後まもなくしてガリア人が、アルプス山脈の麓のわずかな地域を除いて、ポー川流域の平野から一掃されたのを目撃したとき、この人びとの最初の侵攻も、その後の軍事行動も、最終的な退去も、このまま人びとの記憶から消え去るようなことがあってはならないと考えた」

ポセイドニオス (前 135 年頃-前 51 年頃)

1. 首狩り, 人身御供

1) シチリアのディオドロス (著作活動: 前 60n 年頃-前 30 年) *Library of History*.

V.29.4-5:「敵が倒れると、首^{*4}をはねて自分の馬の首^{*9}に付ける。相手から剥ぎ取った武具の血まみれになったのは、…戦利品として持ち帰り、戦勝の凱歌をあげ祝勝歌^{*10}をうたい、これら勝利の初穂を…自分の家の入口に釘で打ちつける^{*11}。

敵方のなかでも一番の名だたる戦士の首^{*4}は杉から採った油で念入りに防腐処理して保管し、客人たちに見せてはもったいをつけて、…この首級^{*4}と引換えに多額の財貨を差し上げるというのに、…首とおなじ重さの黄金でも承知しなかった^{*12}、と自慢する者もいる」

V.31.6:「この族民の間では、その野蛮さ相応に、供犠についても常識はずれに非道なことを行う。悪事を働いた者たちを五年のあいだ獄につないだ後、串刺しにして神々に捧げ、ほかの初穂の供犠の品といっしょに火に投じて供え^{*14}、そのため非常に大きな薪の山を準備する。捕虜をも供犠の品として用い、神々の祀りに供える」

2) ストラボン (前 64 年頃-後 21 年), *Geography*.

IV.4.5:「思慮のなさに加えて野蛮で人間ばなれしたところがあり、これは北方諸族に付きもの一番大きな特色である。すなわち、戦場を去るときに敵兵たちの首^{*4}を馬の首^{*9}にくくり付け、持ち帰ると戸口に釘付けにして見せ物にする^{*11}。すくなくとも、ポセイドニオスは自分の眼でこの光景を、しかも数多くの場所で見たとし、はじめのうちは嫌悪をおぼえていたが、その後は馴れたので気分が落ち着くようになった、と述べている。高名な戦士の首^{*4}を杉から採った油で防腐処理しておいて客人たちに見せ、首とおなじ重さほどの黄金を積まれても返そうとは思わなかったろう^{*12}。彼らは、人間を犠牲として捧げると、その背中へ剣を打ち下ろし、犠牲がけいれんする様子によって占っていた。また、供犠の役はドルイドに限られていた。人身御供^{*14}のやり方はこれ以外にもあるという。すなわち、何人かの犠牲を弓矢で射たおす、神域内で

刺殺する、あるいは干し草やたきぎを使って巨像を作り、その中へあらゆる種類の家畜や野生動物、それに人間たちをも投込むと丸焼きにする、という習慣があった」

3) リウィウス（前59-後19年）*History of Rome*.

X.26: [前295年]「一部の著作によれば、ケルシウムからそう遠くないところで敵のガリア人騎兵が何人か、ローマ兵の首*4を馬の首や槍の先にぶら下げて*9、いつものように勝利の歌*10をうたうのを、ローマの執政官らが遠くから見ていた」

XXIII.24: [前216年ポー川流域の一部を支配していたポイイ族が]「執政官の遺骸を裸にして、首を切りおとして戦利品として神殿に運び、慣習に従って首を洗い、頭蓋骨に金箔をはった*4。これは献酒をそそぐ神聖な器として、また祭司らのコップとして用いられた」

4) アテナイオス（後3世紀）*The Learned Banqueters*.

IV.154b: 「『歴史』第23巻でポセイドニオスは語っている。ケルト人は宴席で一騎打ち*13をすることがある…時には接近しすぎて相手に傷を負わせてしまうこともある。そうすると、傷つけられた方にはむらむらと敵意が湧いて…相手を殺してしまうことにすらなる。ポセイドニオスはさらに言う。昔は、食卓に牛の脚がまるごと出されると、[取り合いになり]ふたりは立ち上がって一騎打ちとなり*13、相手を殺すまで戦った。このほかさらに、…長方形の楯の上に大の字になり身を横たえる。すると介添人がその者の首*4を剣をもってかき切る、そのようなことをする連中もいた」

2. ケルト人の戦闘法・風習その他

1) シチリアのディオドロス（著作活動: 前60年頃-前30年）*Library of History*.

V.2.26: 「並外れてのぶどう酒呑みで²、…イタリア商人たちは、舟や荷車を使ってぶどう酒を運び、酒の小びん一本を渡して子供ひとり在家事奴隷として交換する」

V.2.27: 「神域やその地方で神に捧げた神苑のなかには、大量の金を神々に奉納したのが散乱しているのに、地元民は誰ひとり神を恐れてこれに手をふれようとしなない」

V.2.29: 「なかには、命を惜しまぬあまり、武具もつけず腰帯一つで*3危地へ下り立つ者もいる…敵と対陣すると戦列の先頭に出て*3一騎打ち*13を呼び掛けるのが慣わし」

V.2.30: 「敵を震えあがらせるような衣服を用いて內衣はあらゆる種類の色で染めて花柄をいっぱい*8にあしらひ、…上に羽織る肩留め軍衣には縞模様が入り*8、冬期には毛のついたもの夏期には毛のないものを用いる。また、身丈ほどもある長い大楯を使い、楯には独特の模様があって、なかには、ブロンズの動物の浅い浮彫像をつけている例もある。…また、ラッパを使うが、これがギリシア人の聞いたことのないような独特の音色を持ち、この笛を吹いて荒々しく戦の動乱の場にふさわしい響き⁷を投げかける。胴鎧には鉄の鎖で編んだのを使うが、自然が与えてくれた身体ひとつで満足している兵たち*3もあって、武具も着けずに戦う。ふつうの剣の代りに幅広の長い內衣を金色や銀製の腰帯*8で締めている戦士もいる」

2) **アテナイオス** (後3世紀) *The Learned Banqueters*.

VI.249a:「ダマスコスのコニコラスによれば、ケルト人のソティアニ族の王はケルト語でシドゥロイと呼ばれる護衛兵600人に身辺を警護させ…彼らは王と同じ権勢を得、王と同じ服装をして同じ生活をする」

3) **ストラボン** (前64年頃-後21年), *Geography*.

IV.4.2: ことごとく狂気じみているほどの戦闘好き*1で勇敢*7でもあり、すぐ戦に走るが、そのほかの点では裏表もなく邪気もない。このため、怒りに駆られるといっしょになって戦をはじめ、戦い方にも駆引きがなく、謀りごとをめぐらそうともしないから、戦術によって破ろうとするには扱いやすい敵でもある。…戦闘力は体格が大柄*6 のに加えて人数が多い*5 ことから来るもので、単純率直な性格だから容易に集って大勢になる」

IV.4.5:「単純と勇敢*7 という性格に加えて思慮がなく物ごとを大げさにするところ、派手好み*8 のところが非常に目につく。その証拠に金の飾りを身につけ、まず首のまわりにネックレス、腕と手首にプレスレット*8をつける。身分の高い人びとは、衣服も色染めした上に黄金*8をちりばめたのを着用する」

4) **リウィウス** (前59-後19年) *History of Rome*.

V.34: [ポー川流域への移住について] 増えすぎた人口*5を削減するために二人の甥に大勢のケルト人とともに新天地にたどり着くように命じた(註58参照)。

VII.9-10:「ガリア兵は戦士というより剣闘士のような並外れた体格*6、きらきらした外衣と彩色して彫金*8で浮彫した鎧をまとい…ローマ軍司令官が向かってきたガリア人戦士と一騎打ち*13、ガリア人を殺害して血まみれの金の首飾り*8を奪って自分の首にかけた」

カエサル (前100-前44) *Galic War*.

VI.16:「ガリア人は不治の難病で苦しんでいる人とか…などは、神前への生贄として人間を捧げる。…彼らはこの犠牲式を執行するため、ドルイドを使う。彼らは、一人の人間の命を救うには、もう一人の人間の生命を与えないかぎり、不死の神々の神意を宥めることはできないと考えている。このような人身御供は、国家的な制度としても認められている。ある部族は、枝編細工で非常に大きな人形を拵え、その四肢の中に生きた人間をいっぱい詰め、これに火をつける。人間は炎に包まれて息を絶つのである」

パウサニアス (2世紀後半), *Description of Greece*.

I.4.1:「この種族がガラタイ (Γαλάται, Galatai) という名前で呼ばれるようになったのは比較的最近のことで、彼らは元来、ケルト人 (Κελτοί, Keltōi) と自称し、他のもろもろの種族の間でもその名前で通っていた」

I.4.4: [前280-前278年ガラタイ人のギリシア侵入, デルフィ攻撃について] 「アテネ軍は…ギリシア諸国を救おうと懸命になっていたが、ガラタイ人のほうは…ひたすらデルフィの町とアポロンの聖財の掠奪に猛烈な意欲を燃やしていた。…肉薄戦に突入したとたん、雷と落雷によって碎け散った岩石がガラタイ軍めがけて降りそそぎ、しかも、この恐怖に加えて武者姿の人影がバルバロイを襲った」

I.4.5:「ガラタイ人の大半は船でアジア〔小アジア〕へ渡り、その沿岸地方を荒らし回っていた。ようやく年月を経て、…ガラタイ人は、…フリュギア人の町アンキュラ〔現在のアンカラ〕を占領して、サンガリオス川より奥の地域（ガラティア）を支配した」

I.4.25:「パルテノン神殿の南壁のそばには、…巨人族の伝説的な戦争とか、アテネ軍とアマゾン族との合戦、マラトンにおけるベルシア軍に対するアテネ軍の武勲、そしてミュシア地方におけるガラタイ族の壊滅を表わす彫刻が並んでいるが、これらすべてを奉納したのはアッタロス一世で、それぞれ二ベキエスほどの大きさである」

カエサル著作を参照して書いているのは確かであろう。なかでも、ケルト人の風習に関する認識に多大な影響を与えたのがポセイドニオスである⁵⁹。ポセイドニオスは、ストア派の哲学者として活動するとともに、ポリュビオスの『歴史』を引き継いで前145年からのローマ史を書き続けた。その資料集めを兼ねて前90年代にイベリア半島西岸やマルセイユなど地中海沿岸を広く視察したとされ、特に強い関心を示したのがガリア南部のケルト人であり、その生活や風習であった。なぜなら、前121年にこの地方はローマによる征服が完了して属州ガリア・ナルボネンシスになり⁶⁰、ローマ人の間でもケルト人に対する関心が高まっていたからである。最終的にポセイドニオスは『歴史』を52巻にまとめ、その第23巻がケルト人についてと言われる（表1のアテナイオス）。しかし、彼の『歴史』はわずかな断片しか伝わっていない⁶¹。特に第23巻は、ディオドロスやストラボンの著作のなかの言及あるいは引用によってその概要を伺うしかない。

⁵⁹ ポセイドニオスは、シリアのアパメアに生まれ、アテネでストア派のパナイティオス（ロードス）に師事し、後にロードスに居を構えて哲学を教授した。教え子の一人にキケロがいる。ポセイドニオスの経歴や著作について、Tierney, 1969; Cunliffe, 2003, pp. 13-17; Freeman, 2006, pp. 7-17.

⁶⁰ 'Gallia Transalpina'（ガリア・トランスアルピナ）。イタリアから見て「アルプスの向うのガリア」と呼ばれた地方で、現在のプロヴァンス、ラングドック地方。

⁶¹ これら断片について、Edelstein and Kidd, 1989, pp. xxviii-xxxii.

このため、彼らが原本そのものを閲覧したとしても、その内容に加筆、修正を行った可能性はあるが、ほぼ同じ内容が引用されていることから、ディオドロスらは原本の趣旨を伝えていると解釈できるであろう。

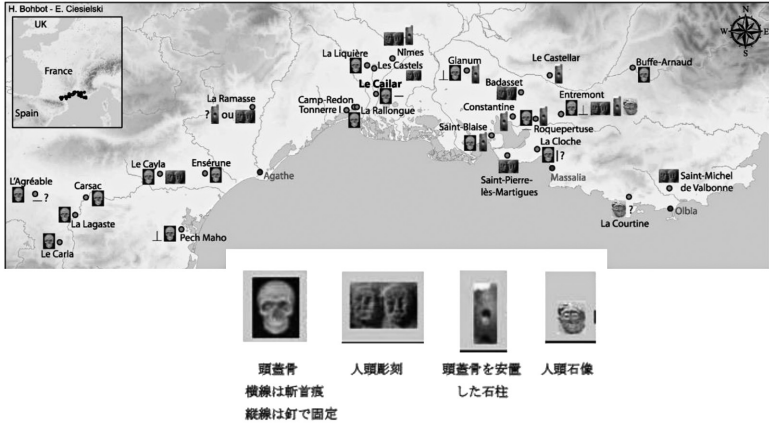
表1から、ギリシア人やローマ人のケルト人像は、ポリュビオスとポセイドニオスの著作を究極の情報源にしていたと思われる。たとえば、*1好戦的、*2酒呑み、*3裸体で最前線で戦う、*4首狩り、*5人口が多い、*6体格がいい、*7勇敢、*8派手好み、という特徴は、ポリュビオスの著作に現れており、それが後代の著者によって多少の手を加えられながら、受け継がれていったと言える。したがって、ポセイドニオスの独自性は*9から*14にあり、ポリュビオスが指摘した首狩りをより詳細に書き、それに一騎打ちと人身御供を加えたことにある。

わが国でもギリシア人、ローマ人の描いたケルト人像に「ステレオタイプ」というレッテルを貼ることがあるが、それはまさしく情報源が同じだったからであり、当然のことであった。みずから取材するよりも、書斎で先人らの文献にあたるのが、当時の著作家の作法であったようで、「ステレオタイプ」は、悪いことではなかったようである。

したがって、ストラボンらがあげたケルト人の風習は、かならずしもストラボンらの時代にも続いていたとは言えない。たとえば、首狩りである。最近、ローヌ川河口近くにあるル・カイヤール (Le Cailair) の集落で武器などととも約100人分の頭蓋骨の破片が発見され、その11の破片に松ヤニなどで防腐処理が施されていたことが判明した(図4)⁶²。おそらく晒し首にして保存するためと推測され、ディオドロスやストラボンの書いたとおりであるが、発見されたのは前300年から前200年の地層からであり、ストラボンらの時代の頭蓋骨ではない。また、図5は、同じくガリア南部のロクペルテューズ (Roquepertuse) にあった祭殿の石柱で、頭蓋骨が安置されていることでわが国でも知られる遺跡である。考古学者によれば、ここは前200年から前124年のあいだに、おそらくローマ軍によると思わ

⁶² Ghezal et al. 2019, pp. 181-188 (2003年から続いた発掘の報告書)。

図4 人頭崇拜の痕跡（ガリア南部）



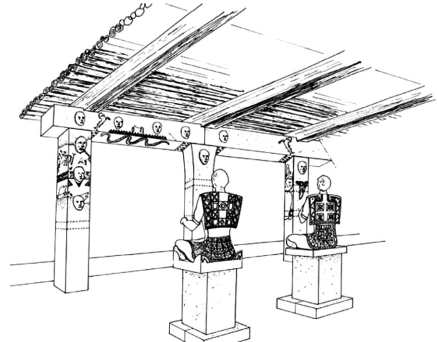
出典：Ghezal et al (2019), p. 182 (Fig. 1)

図5 ロクペルテューズの祭殿（前3世紀-前2世紀）



2. 祭殿内部推定図

Musée Borély, Marseille, France 収蔵
出典：Haywood, J. 2014, p. 60 (Plate10)



1. 頭蓋骨を安置した石柱

19世紀末に祭殿跡から彩色された10体の胡座の戦士像が発掘され、祭殿内部はこのような戦士像が頭蓋骨を見守っていたと推測される。

出典：Dietle, 2010, p. 328 (Fig. 8.28)

れるが、破壊されている⁶³。また、前97年に元老院が人身御供を禁止する

⁶³ Dietle, 2010, p. 372.

決議を出している⁶⁴。このような事実から、ポセイドニオスは前90年代にガリア南部を旅しており、おそらく図5に見られるような神殿あるいはその破壊跡を実際に見たであろうが、人頭崇拜の風習そのものは、すでに終末期に入っていたと思われる⁶⁵。

ふたたび表1に戻って、ギリシア人、ローマ人にとってケルト人とはどのような存在だったかであるが、まず、第一に、どの著作でもケルト人は手ごわい敵であり、狂暴で恐ろしい敵として繰り返されている。これは、すでに述べたように、実際にローマ市やデルフィの聖地が襲撃されるという出来事があり、その衝撃を語り継ぐ意味もあったと思われる。同時に敵の手ごわさ、強さを強調すればするほど、ギリシア、ローマの勝利を偉大なる勝利と思わせる効果があり、それを考慮してのことでもあろう。

しかし、ケルト人が一方的に非難されているわけではない。たとえばポリュビオスは、ローマ市襲撃の記憶がまだ残るなかでケルト人への恐怖を語るが、他方では、ケルト人(ガリア人)がローマ軍に立ち向かうのは、「ローマが戦争をしかけてくる目的が…住民を根こそぎにし壊滅させることだと悟ったからなのだ」と語り(II.21)、一定の理解を示す。また、勇敢で簡素な生活や戦場での統制について敬意を表しているとも受け取れる。

首狩りや人身御供についても同様である。このような風習は、ギリシア人、ローマ人にとってはおぞましいことであり、野蛮の象徴であろうが、たとえばディオドロスはケルト人が輪廻転生を信じていること(V.28.6)、また、人身御供は予言の手段であり、常に人間と神々とをつなぐドルイドによって統制されていると語り(V.31)、非難はしない。この点はカエサルもストラボンも同様であり、野蛮ではあるが、統制された異文化と見ているようである⁶⁶。ローマによるガリア南部の征服と属州化が進行し始める

⁶⁴ 'ne homo im molaretur'. Pliny the Elder, XXX. 3, XXIX. 12.

⁶⁵ Freeman, 2006, pp. 102-114.

⁶⁶ ギリシア人、ローマ人の「他者」認識について、Gruen, 2011, pp. 141-147.な

なかで、「ケルト人は単純で恐れるに足らない」という、ポセイドニオスからのメッセージを伝えているように思われるのである。

2-2) ケルト人の移動

紀元前 400 年頃からケルト人はおおがかりな襲撃と移動を繰り返した。地図 6-2 は、B.カンリフによるケルト人の移動のおもな行路である。繰り返しになるが、行路の一つがアルプスを越えてイタリア半島への南下であり、前 400 年頃にはケルト人の一派がポー川流域に移住し、そこから前 390/387 年にローマ市を包囲・掠奪している⁶⁷。もう一つがドナウ川に沿って東へ進む行路で、その一派がドナウ川の中流域に定住し、そこからバルカン半島を南下して前 279 年にはデルフィのアポロン神殿を襲撃した。ギリシア軍の攻撃によって退去を余儀なくさせられると、この襲撃に参加した一派が小アジアへ渡り、現在のアンカラを中心にガラティア国を樹立した。前 3 世紀の後半までにケルト人のおもだった移動は終了したが、襲撃や小規模な移動は次の 200 年のあいだも続いた。

i) 移動の背景

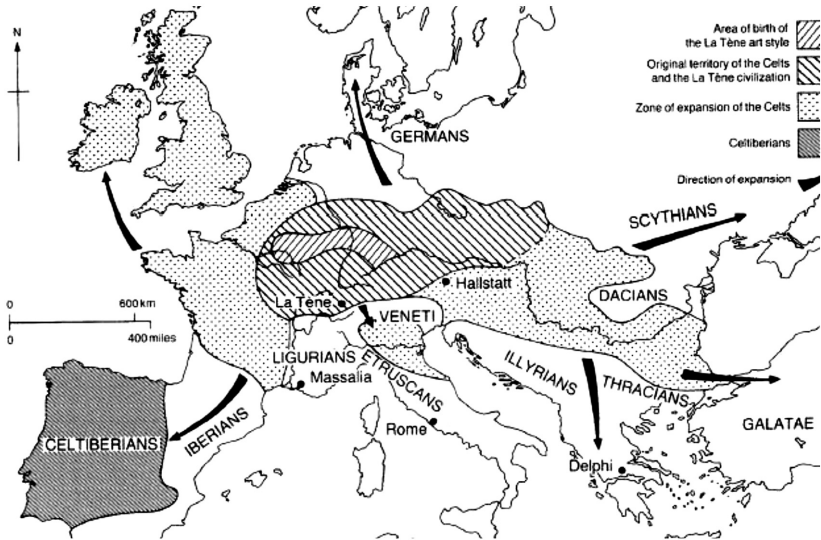
ケルト人の襲撃と移動の原因として、ポリュビオスやリウィウスの文面からは過剰人口が伺われ、イタリア半島南下については、「豊かな土地」「おいしい果物とワイン」が特に加えられている⁶⁸。おそらく本格的な移動の前にすでにアルプスをまたいだ交流があり、その情報をもとに肥沃なポー川流域に波状的に進出していたと推測される。この地域にケルト語の一つであるレポント語が生まれたのも、このような交流が長期にわたって行われた結果と考えられる。また、東方への移動、特にギリシアや小アジアへの移動の背景として、前 323 年のアレクサンドロス大王の死去に伴う帝国

お、ヘロドトスによれば、スキタイ人の間でも首切りと頭蓋骨を杯にする風習があるという。Herodotus, IV. 64-65.

⁶⁷ ローマ占領をポリュビオスは前 387 年とし (II. 18)、リウィウスは前 390 年としている (V. 37)。

⁶⁸ Polybius, II. 17; Livy, V. 34.

図6-1 ケルト人の移動・移住(旧説)



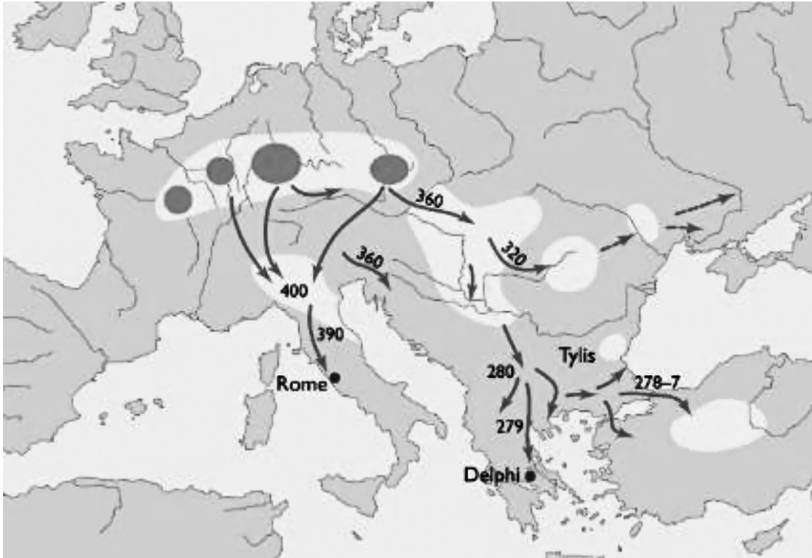
出典：Megaw and Megaw, 1995, p. 11

の崩壊があげられる。アドリア海沿岸のケルト人が大王に使節を派遣して面会したことが伝えられており、傭兵として従軍していた可能性もある⁶⁹。いずれにせよ、アレクサンドロス帝国の崩壊の間隙を縫った進出と言えよう。さらに、ポリュビオス(II. 17)やアテナイオス(VI. 249a)が書いているように(表1)、部族の権力者がその地位を保つには多数の取り巻きや戦士を抱えなければならず、それを維持するためにも戦利品が必要であった。これがケルト人の繰り返される襲撃や移動の一因でもあったと推測される⁷⁰。

⁶⁹ ほぼ同じ話をストラボン(Srtabo, VII. 3. 8)と2世紀のギリシア人歴史家で『アレクサンドロス東征記』を書いたアリアノス(Arrian, I. 4)が伝えている。

⁷⁰ ポリュビオスによれば(II. 19)、戦利品の分け前をめぐる争いになるのは、ケルト人の間ではいつものことであった。

図 6-2 ケルト人の移動・移住（修正説）



ケルト人豪族跡地（初期ラ＝テーン期） ■
ケルト人の定住跡 ■

出典：Cunliffe (2018), p. 135.

ii) ガリア人とガラタイ人

次に、襲撃と移動に関する史料には、ケルト人がラテン語で「ガリア人」'Galli', ギリシア語では「ガラタイ人」(Γαλάται, Galatai) と呼ばれることが多くなる。ディオドロスによれば、ケルト人とは「マルセイユの北の内陸部とピレネー山脈のこちら側、そしてアルプスのすそ野に住む諸族の呼び名」であり、「ガリア人／ガラタイ人は、これらの地方より北、ドナウ川沿いの地域やスキタイにまで至る地域に住む諸族」の呼び名であるという。つまり、本来の'Celtica'に住むのがケルト人であり、そこから東へと移動した諸族が「ガリア人／ガラタイ人」ということになる。さらにディオドロスは、ギリシア人はこのように区別してきたが、「ローマ人がこれらの呼び名をひとまとめにして、ガリア人と一つの呼び名で呼んだ」という⁷¹。ディオドロスの少し前になるが、カエサルが『ガリア戦記』のなかでケルト人

という呼称を用いたのは、冒頭の「彼らの言葉ではケルト人、われわれの言葉ではガリア人と呼ばれる」の一度だけである。ケルト人の呼び名は、おそらく前1世紀半ばには使われなくなったのであろう。

iii) ケルト人のホームランド

ケルト人の移動をめぐる問題の一つは、彼らの本拠地はどこか、つまりどこから出発したかという問題であり、もう一つはどこへ移動したかという問題である。地図6-1は、いわゆる「旧説」を代表するメガウ夫妻によるケルト人移動図である。それによれば、ケルト人はアルプスの北の中央ヨーロッパに起源があり、ここがラ・テーヌ文化発祥地でもあり、ここから、ケルト人は数世紀にもわたる移動によって西へ、イベリア半島やブリテン、アイルランドへ移住し、南はイタリア半島へ、東はカルパチア盆地やバルカン半島へ、最終的には小アジアへ移動したという。メガウ夫妻ら旧説の解釈のなかで南や東への移動は古代の著作にも、また考古学資料によっても証明されており、異論はない。

問題となったのは、西への移動であり、とりわけブリテンやアイルランドへの移住である⁷²。すでに紹介したように、古代の著作にはブリテンやアイルランドへの移住を示唆するような記述は皆無である。それは、ポリュビオスやリウィウスだけでなく、ブリテンに上陸した経験のあるカエサルも、ブリタニア総督アグリコラを岳父にもち、その遠征記を書いたタキトゥスも、ブリテンの住民をケルト人と呼ぶことはいっさいない。1960年からは考古学者からもケルト人の移住を示す証拠がないことから、移住説に強い疑問が提起されてきた⁷³。1990年代末にケルト研究者の間に「懐

⁷¹ Diodorus, V. 32.

⁷² イベリア半島にハルシュタットやラ・テーヌの影響を示す遺物などがなく、旧説の考古学者らは「イベリア半島にきたケルト人は彼らの言語は保ったが文化は失った」と説明してきた。Hoz, 1992, p. 19.

⁷³ その代表が Grahame, 1966, pp. 172-189. この問題に関するイギリス考古学界の動向について Cunliffe, 2010, pp. 14-15; Collis, 2014, pp. 292-294.

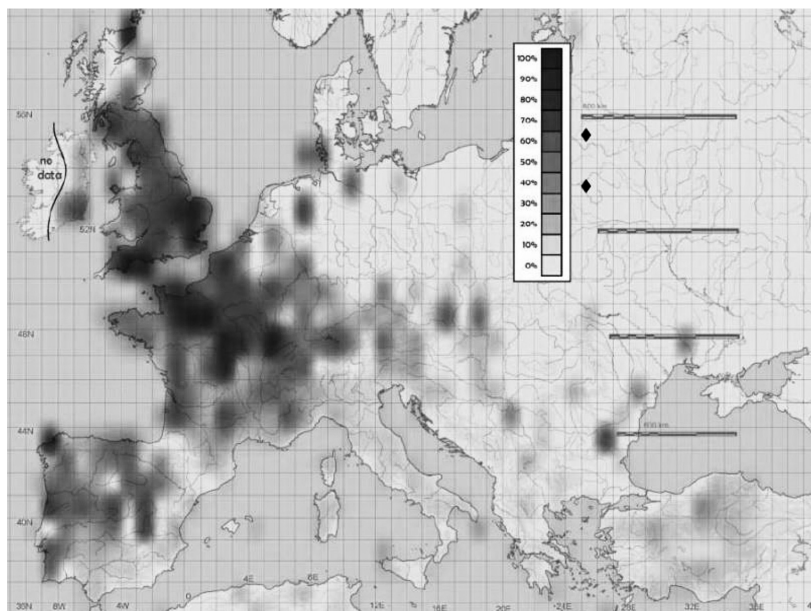
疑派」が生まれると、彼らが真っ先に批判したのが旧説の移住説である。そもそもケルト人移住説は、次節で説明するように、大陸ガリアとブリテンの言語の類似を説明するために16世紀にブキャナンが提唱した解釈に始まる。それが、17-18世紀のペズロン、スルウィッドを経て完成され、20世紀末まで不動の定説となってきたのである。現在、ブリテンやアイルランドへのケルト人移住説はケルト研究者の間では否定されている。B.カンリフの地図はその例である。

ケルト人移住説の否定は、新しい問題を生むことになる。移住説を用いずに、ガリアとブリテンの言語の類似をどのように説明するかという問題である。たとえば、P.シムス・ウィリアムズがギリシア・ローマの著作などからケルト語系と見なされる地名20,000語を選び出し、その分布と地名の数をデータ化しており、それを濃淡で示したのが図7である⁷⁴。明らかに、イベリア半島、フランス、そしてブリテンが特に濃い。これを最も単純に解釈すれば、濃度の濃い地域ほどケルト語が多く話されたことになる。もちろん、地図7が実際に示しているのは、かつて存在した地名のすべてではなく記録された一部であり、空白の地域は記録が残されていないだけの可能性もある。それでも、イベリア半島、フランス、ブリテン、アイルランド東部でなんらかのケルト語が話されていたことは否定できない。

ケルト語をケルト人を識別する手段にすることには、序で説明したように、批判もある。「ケルト語」という概念は、近代の産物であり、古代にはなかった考え方だからである。もちろん、ケルト人が話す言葉がケルト語であって、ケルト語を話す人がケルト人とはかならずしも限らない。これ

⁷⁴ Sims-Williams (2006) が一定の面積に現れる地名の数をパーセントに表した (Fig. 11.1-11.2, pp.301, 304)。そのデータを Cunliffe が濃淡で表す地図を作成した。(2010, p.17; 2018, p.135; 2019, p.11)。同じデータで Collis (2003, p.232)、や Oppenheimer (2010, p.124) も地図を作成している。なお、北イタリアや小アジアの濃度が薄いのは、10%以下をカットしたためであり、アイルランド西部が空白なのはデータがないためである。

図7 古代の著作などに記されたケルト語系の地名（頻出濃度）



出典：Cunliffe, 2019, p. 11 (Fig. 1-5)

はケルト研究最大の難問と言える問題であり、おそらく研究者の意見が一致するのは難しいであろう。しかし、地名には多くの場合その地域の話し言葉が使われるのも事実であり、また、古代のケルト人の分布はケルト語の分布でしか説明できないのも事実である。ケルト人のおおよその分布を知る手がかりとして、P.シムス・ウィリアムズの集めたデータが多くの研究者に利用されるのは、このためである⁷⁵。

ケルト語のこのような分布を移住説によらずに説明しようと試みているのが、序で紹介したJ.コッホとB.カンリフを中心とする「ケルト語は西か

⁷⁵ 「ケルト人とはケルト語を話す人びと」というのが、J.コリスを除くおもなケルト研究者の理解である。Renfrew, 1987, p. 249; Sims-Williams, 2006, p. 2; Sims-Williams, 2012, p. 442; Koch & Cunliffe, 2016, p. 3; Cunliffe, 2018, p. 53.

ら」論である。その主張は、要約すれば、次のようになる⁷⁶。

- a) 前 5000 年から前 2700 年頃に、大西洋沿岸に交易のネットワークが形成され、印欧祖語からケルト祖語が分岐し、この地域の共通語（*lingua franca*）になる
- b) 前 2700 年頃から前 1700 年に、大西洋沿岸の錫などの交易が活発化し、ケルト祖語は、前 2800 年頃からイベリア半島西岸で製造が始まった鐘状ビーカーとともに中央ヨーロッパへ伝えられた
- c) 前 1700 年-前 900 年に、大西洋沿岸の交易はさらに活発化し、ケルト祖語はこの地域全域の話し言葉となり、沿岸から内陸部へ拡散
- d) 前 900 年頃に、カディスを中心に始まるフェニキア人植民市の形成によって、イベリア半島西岸は地中海交易圏に組み込まれ、大西洋沿岸交易から脱落して、ケルト祖語からケルト・イベリア語が分岐
- e) 前 600 年以前にはフランスとブリテンそしてアイルランドが大西洋沿岸の交易ネットワークの一部だったことを示す豊富な証拠があるが、前 600 年以後、アイルランドとブリテン北部（スコットランド）がこのネットワークから脱落して孤立化の時代に入り、ゲール語が分岐

このように移住に代わって、大西洋沿岸交易の盛衰が印欧祖語からケルト祖語の分岐とケルト諸語への分岐を説明するキーワードになっている。なかでも根幹をなすのが b) であり、鐘状ビーカーのイベリア半島発祥説をもとに、ケルト祖語と鐘状ビーカーとが中央ヨーロッパへ伝播し、そこからヨーロッパに拡散したという。「ケルト語は西から」とは、この動きを指す。確かに、図 7 によれば、ケルト語系の地名は中央ヨーロッパが大西洋沿岸と比較して著しく少ない。したがって、中央ヨーロッパをケルト人

⁷⁶ プロジェクトの最終報告書にあたる第四卷（2019）の Cunliffe, ch. 1 (pp. 1-16), Koch & Cunliffe, ch. 7 (pp.192-204) でも繰り返されている内容を要約した。

とケルト語のホームランドとする旧説よりは、説得力がある。また、2015年に発表された先史DNA解析の結果を受けてB.カンリフは、中央ヨーロッパへ伝わったケルト祖語が東から来たヤムナヤ由来の文化と影響しあって広く拡散したという折衷説を出している⁷⁷。

しかし、最近の先史DNAの解析結果は、b)について、より根本的な疑問を投げかけている。たとえば、2018年のオラルデらのDNA解析結果は、そもそもケルト祖語の母体になるべき印欧祖語は鐘状ビーカとともに西ヨーロッパに伝わったことを示し、コッホらの主張との間に時差がある。また、イベリア半島で鐘状ビーカーとともに埋葬された骨格標本のDNAからは、印欧祖語を運んだとみられるヤムナヤ由来の遺伝子は認められず、むしろ鐘状ビーカー文化以前の人口集団と同じであったという⁷⁸。したがって、鐘状ビーカーは仮にイベリア半島西岸が発祥地だとしても、西ヨーロッパへの伝播は人の移動によるのではなく、知識の伝播によることになる⁷⁹。そうすると、ケルト祖語はどのようにして中央ヨーロッパへ伝わったかという問題が出てくる。さらに、ブリテンで鐘状ビーカーとともに埋葬された骨格標本のDNAのなかにステップ由来の遺伝子の占める割合は、現在のオランダにある鐘状ビーカー文化の墓から出た骨格標本の含有

⁷⁷ Cunliffe, 2019, p. 16.

⁷⁸ Olalde et al. 2018, pp. 190-196.

⁷⁹ 鐘状ビーカの発祥地の定説となってきたのがイベリア半島西岸説で、その根拠となったのは、現在のポルトガルのテージョ川 (Tagus) 河口で発見され沿岸地帯に広まった鐘状ビーカー (Maritime Bell Beaker) が前2750年頃の製造とされ、これが現存する最も古い鐘状ビーカーだからであり、ここから大西洋沿岸地域へ、さらにヨーロッパの大陸部分へ広がったされる。これより古い鐘状ビーカーが出ていないので、現在でもこの説が有力であり (Cardoso, 2014, pp. 56-75)、コッホらの「ケルト語は西から」論の根拠となっている。しかし、これには異論もあり、オランダとドイツ北西部を囲む縄目文土器文化圏の西端を発祥地とし、縄目文土器から発展したとする説もあるが、定説とはならなかった。詳しくは Jeunesse, Ch. 2014, pp. 158-166。オラルデらの解析結果は後者の説を支持する。

率と一致したという⁸⁰。アナトリア由来の遺伝子を持つ最初の農耕民が、地中海沿岸からイベリア半島経由でブリテンにきたことはわかっているが、オラルデらの解析結果は、二番目の移住者であるヤムナヤ由来の遺伝子を持つ集団は、イベリア半島経由ではなく英仏海峡を渡って鐘状ビーカ文化とともにブリテンにきた可能性を強く示唆している。

言語や文化がすべて遺伝子によって決まるわけではけっしてない。コッホやカンリフらは、言語学や考古学の研究の積み重ねを土台に「ケルト語は西から」論を展開しており、そのすべてが遺伝子解析の結果によって否定されたわけではない。なにより、DNA 解析された標本数が少なく、また地域的にも限られているため、今後の研究をまたなければならない⁸¹。同時に言語学や考古学の側にも、印欧祖語の拡散に関する「考古遺伝学」による結果について、根拠のある議論が求められていると言えよう⁸²。

ケルト人のホームランドの問題に戻ると、先にも述べたように、図7からは中央ヨーロッパをホームランドとするのは無理がある。この地域はケルト人が東へ移動する行路上にあり、移動部隊の一部が定住した可能性が強い。そうだとすれば、あのハルシュタットやラ・テーヌの物質文化を作ったのは、彼ら移住者か、それとも、この地域のもともとの住民かという問題が出てくる。これについては、考古学の展開というテーマで近代の後

⁸⁰ Olalde et al. 2018, p. 193; Fig. 3.

⁸¹ Koch & Cunriffe (2019) の第6章 (Silva et al. pp. 154-191) は、先史 DNA 解析とケルト語の起源問題について解説しており、この分野の動向を知ろうと有益である。なお、このチームにはアイルランドについて解析した L. M. カシディらが加わっている。また、2019年3月には I. オラルデを筆頭に D. ライクや上述の M. シルヴァら総勢 111 名によってイベリア半島の 271 人の先史時代人から全遺伝情報を抽出してその解析結果を *Science* 誌上に発表するなど (Olalde et al. 2019)、今後もこの動向は続くであろう。

⁸² Koch & Cunriffe (2019, ch. 7) は、印欧祖語に関するアナトリア説とステップ説を対立的に捉える必要はなく、先史 DNA の解析結果はむしろケルト語研究を活性化させると捉えているようである。

半で検討したい。

P. シムス・ウィリアムズは、ケルト語のホームランドを探すこと自体に問題があると指摘する。なぜなら、ケルト人は決して単一民族ではないからであり、さまざまな地域のさまざまな言語が融合して、言語学者がケルト語と呼ぶ言語が出来たからである⁸³。これは、「ケルト人とは誰か」という問いの答えでもある。ケルトイあるいはケルタエという呼び名は、エスニシティを表すというより、やはりヘロドトスの言うように、ギリシア・ローマ世界の西および北にいる「未知の人」程度の呼び名だったのではないだろうか。

以上が、ローマの支配下に入る前のケルト人をめぐる史料とその問題である。C.レンフルーの八つの用例のなかで、この時代にあてはまるのは、1の他称は確かである。用例6の「好戦的で不撓不屈の魂」は、ポリュビオスらの記述をそのように読めないこともないが、「好戦的」というより、むしろ戦わざるをえなかった側面があり、また、すでに述べたように、敵であるケルト人を語る際の「決まり文句」として繰り返された側面もある。さらに、ケルト人のこうした気質が強調され称賛されたのは、19世紀のことであり、アイルランド西部やスコットランドのハイランドに住む粗野な人びとは、ケルト人の個性の表れであり、その恐ろしいほどに美しい風景は「ケルト人の魂」の宿るところと称賛されという⁸⁴。

2-3) ローマ帝国とケルト人

ケルト人という呼び名が自称として用いられた例は、紀元前1世紀末まで知られていないことは、すでに紹介したとおりである。紀元後についても、著書のなかで自身を「ケルト人の子孫」と名乗っているのは、マルティアリスだけであり、名乗ってはいないがそれを示唆しているのがトログス・ポンペイウスとシドニウス・アポリナリスである。いずれもローマ帝国内で地位を築いた人物であり、ラテン語で著作や書簡を遺している。彼

⁸³ Sims-Williams, 2017a, p. 354.

⁸⁴ Duffy, 1997, p. 67; Kneafsey, 2002, p. 126.

らの活動はかつて敵対したケルト人（ガリア人）の第二世代，第三世代がローマ市民になり，帝国の繁栄を享受するようになった結果である。ケルト人はもはや脅威の対象ではなく，ローマ人の態度も和らいだのである。

そうした事情をローマの歴史家タキトゥス（後55年頃-後120年頃）が，その最晩年の著作『年代記』なかで48年にクラウディウス帝が行った長文の演説を引用して教えてくれる。皇帝の演説は，ローマ市民権をそれまでのガリア・ナルボネンシスだけでなくガリアに拡大することを訴えたものである。タキトゥスによれば，ローマの著名な家系の多くがローマ以外からの移住者だった例をあげ，次のように語ったという。

自分〔クラウディウス帝〕の先祖をたどれば，〔ローマに征服された〕サビニ族にさかのぼるが，それでも先祖はローマ市民権を与えられると同時にローマ貴族の身分に列せられた。…ガリアとの戦争で費やされた期間は，ほかのどの民族との戦いよりも短い。それ以後ずっとガリア人との間の平和と友誼はゆらいでいない。すでにガリア人は，慣習や学芸や婚姻を通じてわれわれに同化したのだ。彼らの黄金と財産をわれわれのもとに持ち込ませようではないか⁸⁵。

ガリア・ナルボネンシスは，イタリアに近いことから前121年に属州となって以来ローマ化が進み，すでにカエサルの時代から元老院への道が開かれていた。大プリニウスは77年に完成した『博物誌』のなかで，ガリア・ナルボネンシスを「属州というよりも，むしろイタリアというのが正しい」

⁸⁵ Tacitus, *Annals: Books 4-6*, pp. 11-12. なお，1528年にリヨンでクラウディウス帝の演説を刻んだ銅版が発見されたが，演説の冒頭部分と中間が欠損していたという。したがって引用部分が実際にクラウディウスの演説だったかどうか確認できず，タキトゥス自身の考えが織り込まれている可能性もある。しかし，クラウディウス帝が市民権の範囲を拡大したことは事実である。Griffin, 2009, pp. 180-181.

と評している⁸⁶。タキトゥスは、ローマの政治家の経歴を詳しく書いたが、自身の出身などについて語ることはなかった。このため、生い立ちには諸説あったが、現在ではガリア・ナルボネンシスの生まれで、父親は「騎士身分」に属し、属州ガリア・ベルギカの官吏を務めたというのが有力である⁸⁷。「騎士身分」(equites)は、元老院貴族に次ぐ身分で、政治的なエリートではなかったが、それでもタキトゥスは21歳頃にブリタニア総督アグリコラの娘と結婚し、25歳頃には財務官に登用されて元老院議員となっている。ちなみに岳父アグリコラも、その妻もガリア・ナルボネンシスの出身であった。タキトゥスは、著書の多くで各地の部族に言及しても、ガリア・ナルボネンシス内の部族に具体的に言及することはない。タキトゥスにとって、故郷の部族はすでに過去のものだったのか。

i) ポンペイウス・トログス

これに対して、前1世紀、アウグストゥス時代の歴史家ポンペイウス・トログス(Pompeius Trogus)は、自身の系譜を次のように述べ、ガリアの部族の出身であることを公言したという⁸⁸。

トログスの祖先は、ウォコンティ族にさかのぼり、トログスの祖父トログス・ポンペイウスはセルトリウス派討伐〔前77～前71〕で武勲をた

⁸⁶ 'Italia verius quam provincia'. Pliny the Elder, III. 4, pp. 26-27.

⁸⁷ 大プリニウスが『博物誌』のなかで「ガリア・ベルギカの財務代官コルネリウス・タキトゥスの息子」に言及している。Pliny the Elder, VII. 16, pp. 556-557. 大プリニウスの甥、小プリニウスはタキトゥスの親友で、タキトゥスの唯一の同時代人著作家でもあることから、この記述にある息子は歴史家コルネリウス・タキトゥスのこととされる。Mellor, 2011, pp. 10-11; Toher, 2009, pp. 327-328.

⁸⁸ トログスは、アッシリア帝国からアウグストゥス時代までのローマの歴史『ピリッポス史』*Historiarum Philippicarum* 44巻(邦語訳名『地中海世界史』)を遺したことで知られる。ただし、この歴史書は、3世紀の歴史家ユニアヌス・ユスティヌスによる抄録しか伝わっていない。

ててグナエウス・ポンペイウス〔大ポンペイウス〕からローマ市民権を与えられ、父方の叔父はミトリダテス戦争〔前66〕で同じグナエウス・ポンペイウスのもとで騎兵中隊を率い、父も、〔ユリウス〕・カエサルのもとで軍務を果たし、国家官房職、外交使節そしてカエサルの書簡や印璽を管理し、外交使節の受け入れを担う役職についていた⁸⁹。

ウォコンティ族 (Vocontii) はガリア・ナルボネンシス北東部の部族で、この部族の領土は、前58年にカエサルが総督の許可なく属州を通過しようとしたヘルウェティ族を迎え撃つ際の出陣地となり⁹⁰、これがガリア戦争（前58-前54）の契機となったことで知られる。

トログスという名前は、ケルト語（ガリア語）でクランの意味だという⁹¹。ただし、トログスの著作の抄録には、ケルト人 (Celtae) の呼び名は皆無で、イタリア侵入やデルフィ攻撃に参加したケルト人はすべて「ガリア人」Galli と呼ばれている。これは、ディオドロスが説明したように、トログスの時代には、ケルト人も襲撃に参加したガリア人／ガラタイ人も、ラテン語著作ではひとまとめに「ガリア人」と呼ぶようになったためであろう⁹²。大プリニウスによれば、ウォコンティの族長がローマでの裁判の過程でドルイドの護符を持っていることがわかり、クラウディウス帝によって処刑されたという⁹³。大プリニウスは、ガリア・ナルボネンシスやガリア・ベルギカで属州の財務や統治に携わった経歴があり、ドルイドについてある程

⁸⁹ Justinus, *EPITOMA*, XLIII.5; ポンペイウス・トログス著、ユニアヌス・ユステイヌス抄録『地中海世界史』p. 457。トログスの経歴や著作について、Justinus, 1997, pp. 1-15。

⁹⁰ Caesar, *Gallia War*, I.10.なお、属州になる以前、前218年にハンニバルがアルプスに向かう際にこの部族の領土をう回路として通過したことで知られる。Livy, XXI.31, pp. 90-91。

⁹¹ Justinus, 1997, p. 3。

⁹² 前述 35 頁参照。

⁹³ Pliny the Elder, XXX. 3; XXIX. 12。

度の知識を持っていたと推測される。先に述べたとおり、ガリア・ナルボネンシスは、晒し首の祭殿が数多くあったことが知られている(図4)。ローマの元老院が前97年に人身御供を禁止する決議を出しているから、ドルイドの護符の風習も禁止対象になったと思われる。しかも、この地域はローマ化が最も進んだ地域でもある。それでもドルイドの権威がある程度維持されていたと推測される。

ユニアヌス・ユスティヌスはトログスの抄録の「前文」Praefatioで、トログスのラテン語は「古風な言いまわし」だという⁹⁴。属州エリートの子弟として伝統的な修辞法の教育を受けたのであろう。トログス一族は、ローマ帝国の有力者に仕えることで立身出世した好例である。

ii) マルクス・ヴァレリウス・マルティアリス

「ケルト人の血が混ざっている」と公言したのは、ラテン語で10巻のエピグラム(警句)を遺したマルクス・ヴァレリウス・マルティアリス(Marcus Valerius Martialis)である。マルティアリス自身が作品のなかで断片的に語るにところによれば、後40年にヒスパニアのアウグスタ・ビルビリスで、現在の地名ではスペインの北東部、サラゴサ近くのカラタユーで、生まれ育ち(X. 24, XII. 60)、地元で教育を受けたという(IX. 73)。20代半ばにローマに出て(X. 103)、同じヒスパニア出身のセネカ家など有力者の保護を受けながらラテン語詩人として、とくにローマの市民生活を風刺したエピグラムの作者として活動した。特に裕福だったようではないが、それでも所領と複数の奴隷を所有し(II. 38)、最終的には40万セステルティウス以上の財産所有が条件の騎士身分を手に入れている(II. 91-92)。しかし、98年から101年のあいだにローマの生活に終止符を打って故郷に戻り(XII)、104年頃に死亡した⁹⁵。

⁹⁴ 邦語訳 p. 4。原文は'vir priscae eloquentiae'、直訳すれば、「昔の雄弁術を心得た人」。

⁹⁵ 没年は、小プリニウスが知人に宛てた書簡からの推測である。Pliny the Younger, *Letters*, III. 21, pp. 236-237. 書簡のなかで、小プリニウスはマル

マルティアリスは、故郷ではローマ市民として生まれたと思われるが、作品のなかでは都会出身のローマ人に対して「ケルト人とイベリア人の間に生まれた田舎者」などと卑下する一方で、ケルト人とイベリア人の混血であることをたびたび語っている⁹⁶。「ケルト人」の血を引くことはマルティアリスにとって誇りだったのか、あるいは自嘲の表れだったのか定かではない。いずれにせよ、ヒスパニアのケルト語地域出身のラテン語詩人らのなかで、その出身を公言した例は、マルティアリスのほかには知られていない。たとえば、マルクス・ファビウス・クインティリアヌス (Marcus Fabius Quintilianus, 後 35 年頃-後 100 年) は、ローマ帝国の修辞学者として、特にその教育者として知られ⁹⁷、『弁論家の教育』などの著書を遺したが、彼はヒスパニア北部のケルト・イベリア人地域であるカラグリス（現在のカラオラ）出身である。つまり、マルティアリスと同じケルト人の血を引いていた可能性があるが、著作のなかで出身に言及することはない。そもそもヒスパニアについて語ったのは、ヒスパニア語の難解さに言及した一度だけである⁹⁸。

iii) シドニウス・アポリナリス

ガリアのケルト人（語）に言及した最後の例とされるのが、シドニウス・アポリナリス (Sidonius Apollinaris) である。シドニウスは 430 年頃にリ

ティアリスの才能を称え、その死を悼んでいる。

⁹⁶ 'ex Hiberis et Celtis genitus Tagique civis': Martial, *Epigrams*, Vol. I, IV. 55, p. 300; VII. 51, pp. 114-115; Vol. II, X. 64, pp. 374-375; X. 78, pp. 388-389.

⁹⁷ クインティリアヌスの経歴と作品について、クインティリアヌス著・森谷宇一訳、2005、pp.234-244。小プリニウスも教えを受けた一人である。Pliny the Younger, II. 14-9, pp. 126-127.

⁹⁸ Quintilian, I. 5, pp. 152-153.他方で、クインティリアヌスと同郷であるマルティアリスは、自身の作品のなかで「気まぐれな若者たちの導き手、ローマの誉れ、トガの誉れのクインティリアヌスよ、なん年も仕事もせず、せかせかと生き急いでいる哀れな私を許してくれ」と呼びかけている。Martial, Vol. I, II. 90, pp. 186-187.

ヨンの元老院貴族の家に生まれ、祖父や父と同じようにガリア中部のオーベルニュ地方の有力者として貴族らの指導にあたった⁹⁹。シドニウスは、469年末からクレルモン・フェランの司教となり、西ゴート族によるクレルモン攻囲戦の精神的支えとなり(471-475)、そのために西ゴート王により投獄されたが、晩年は司教として、またラテン語詩人として活動し、西ローマ帝国滅亡を見届けて489年に世を去った。

シドニウスは、自身が編纂した全9巻からなる書簡集と、皇帝への頌辞(panegiric)などを遺した。これらは、古代から中世への移行期におけるガリアのさまざまな動きを伝える貴重な史料であるが、ケルト研究の上で注目されるのは、次の二点である。一つは、シドニウスが岳父アウイトゥスの息子に宛てた書簡から、オーベルニュの貴族たちの中のケルト語をシドニウスらを取り除こうとしていたことである¹⁰⁰。これは、5世紀半ばにこの地方では、ケルト語がまだ使われていたことを示す。同時に、帝国の崩壊期にあってもなお、シドニウスは帝国貴族が持つべきはラテン的教養であるという矜持を持ち続けていたことを示している。

注目される二つ目は、475年の書簡である。そのなかでシドニウスは、ローマの保護を受ける権利の根拠として、アルウェルニ Arverni (オーベルニュの人びと)はローマ人と兄弟で、同じトロイアの血を引いていると語っていることである¹⁰¹。そもそもアルウェルニとは、この地方の部族の名称で、オーベルニュの地名はこの部族名に由来する。しかも、アルウェルニ族には、その族長ウェルキングゲトリクスが前52年のガリア戦争のさ

⁹⁹ たとえば、岳父アウイトゥスの西ローマ皇帝推戴に同行してローマに赴き(455-456)、さらに467年にもこの地方の貴族らの陳情を託されてローマに赴いて、ローマ都督(praefactus urbi)に任じられている(467-468)。シドニウスの経歴について、後藤篤子、1982; Harries, 1994, pp. 1-19; Brown, 2012, pp. 400-407。

¹⁰⁰ 'sermonis Celtici squamam'. Sidonius. *Letters* III. 3-2, pp. 12-13.

¹⁰¹ 'fratres Latio dicere et sanguine ab Iliaco populos computare Sidonius'. *Letters* VII. 7-2, pp. 324-327.

なかにカエサルに反旗を翻した歴史があり、ウエルキンゲトリクスはオーベルニュの英雄である。しかし、シドニウスの生涯そして後世に遺した書簡や詩からは、アルウェルニ族の過去などを伺うことはまったくできない。ゴート族やブルグンド族の脅威が迫りくる5世紀中葉のガリアで、シドニウスは最後まで「ローマ的であること」(Romanitas)を追い求めたと言える。ちなみに、シドニウスの墓碑には司教だったことは記されていないという。また、墓碑の没年は東ローマ帝国皇帝の治世年で示されたという¹⁰²。シドニウスの生涯にとって意味があったのは、帝国官職とラテン語による文学活動であり、コンスタンティノーブルにいる皇帝が帝国の正統なる唯一の皇帝であった。

以上がギリシア人・ローマ人以外によるケルト人（ケルト語）への言及の例である。同時代人によるケルト人（ケルト語）への言及は、実質的にはシドニウスが最後となり、これ以後、ガリア人 (Gallus, Galli) がガリアの住民を表現する標準的用語となる。C.レンフルーは、ケルト人の自称として 'Celtic' が用いられた例を八つの用例の一つにあげたが、記録された例は、非常にわずかしかないというのが結論である。

セビリアのイシドルス (560年頃-636年) が *Etymologiae* (『語源』) のなかで、ケルト・イベリア人を、ガリアのケルト人と彼らが定住したヒスパニアのイベロ川の二つの名称が結びついて、そう呼ばれたと説明している¹⁰³。一見するとイシドルスの時代にケルト人が実在したように思われるが、時制はすべて過去形か完了形であり、ケルト人はすでに過去の知識に過ぎないことを示している。イシドルスは後期ラテン教父の代表であり、その著作は中世の西ヨーロッパで数多くの写本が作成され、広く読まれた¹⁰⁴。特に『語源』は中世の西ヨーロッパでは千を数える写本が作成され

¹⁰² Brown, 2012, p. 406.

¹⁰³ Isidorus, *Etymologiarum Libri Viginti*, IX, 114, p. 359.

¹⁰⁴ ベーダの時代のイングランドにおけるイシドルスの著作の写本の数は、教皇グレゴリウス1世の著作に次ぐ多さだという。『語源』だけでなく、イシ

たことがわかっている¹⁰⁵。この作品は、古代からイシドルスの時代までの学問や事物の由来などを説明した一種の百科事典であり、知識の宝庫として修道院がかならず備える蔵書の一つと言われる。たとえばベエダ（672年頃-731年）の修道院であるノーサンブリアのウェアマス・ジャロウ修道院にはイシドルスの八つの著作が収蔵され、そのすべてをベエダが自身の著作のなかで引用あるいは言及している。なかでもベエダの引用、言及が最も多いのが『語源』であり、その範囲は『語源』全20巻のうちの18巻に及んでいる¹⁰⁶。しかし、ベエダがケルト人に言及することはない。

2. 中世のケルト人

ケルト人に関する認識や知識が失われた背景としてあげられるのは、すでに紹介したとおり、ローマ帝国の繁栄のなかでガリアやイベリアのケルト人がローマ化し、同化したことである。もう一つは、中世の西ヨーロッパで有力となった建国神話である。アルウェルニ族のようなガリアの部族がトロイアの英雄の子孫であるという考えは、先に述べたように、すでに5世紀のシドニウスのような著者が書いていたが、この考えが支配的となるのは中世の西ヨーロッパであり、王家や王国の始祖をローマ人と同じトロイアの英雄か、あるいはノアの子孫ヤフェトなど旧約聖書に遡らせる神話である。とりわけブリテンで影響が大きかったのは、トロイアの王族ブルトウスによる建国神話である。

ドルスのあらゆる著作が広く読まれたことが伺われる。Kendall, 2010, p. 103.

¹⁰⁵ Barney, 2006, p. 24.

¹⁰⁶ Lapidge, 2005, pp. 213-214.ウェアマス・ジャロウ修道院の蔵書構成について常見信代, 2015, pp. 26-28. Barney (2006, p.8)によれば、現在に伝わるイシドルスの著作数は17(タイトル)という。

1) 「ブルートゥス神話」と「スコウタ神話」

ブリテンにおける「ブルートゥス神話」の原形は、9世紀初めにウェールズで書かれた『ブリトン人の歴史』のなかに「ブリタニアの名称はローマの執政官ブルートゥスに由来する」と記され、すでに現れていたが¹⁰⁷、それを拡大してブリテンの建国史として完成させたのは、ジェフリ・オブ・モンマスが1136年頃に書いた『ブリタニア列王史』である。ジェフリ作品は、アーサー王物語の原形として、おもにフランスでさまざまに翻案され、中世騎士物語へと展開していくことになったが、ブリテンではイングランド王国とスコットランド王国との関係に重要な役割を果たすことになる。『ブリタニア列王史』にはブリテンに建国した始祖ブルートゥスが死亡すると、ブリテンはその息子三人に分割され、長男がイングランドを、二男がスコットランドを、三男がウェールズを相続するとともに、長男が全島の支配権を保持したという話がある¹⁰⁸。この話をエドワード1世は、王権 (regia dignitate) は分割されずに長男が継承したと解釈し、その後継者であるイングランド王は二男の相続分であるスコットランドに対して宗主権を持つと主張したからである。

これに対して、スコットランドの建国神話にあたるのが「スコウタ神話」である¹⁰⁹。これは、アイルランドの建国神話である『アイルランド侵入の書』を使いながら、スコットランド王国の始祖をアテネ王の息子ゲーデル・グラス (Gáedel Glas) とエジプトのファラオの娘スコウタ (Scota) との間に生まれたイベール・スコット (Iber Scot) とし、エジプトからイベリア経由でアイルランドへ渡って建国、そこからスコットランドに来たという

¹⁰⁷ *Historia Brittonum*, § 7, p. 59.

¹⁰⁸ Geoffrey of Monmouth, *Historia Regum Britannie*, fol. 23 (p. 15); *The history of the kings of Britain*, p. 23. 『ブリタニア列王史』の位置づけについて、青山吉信, 1985, pp. 207-229.

¹⁰⁹ 以下の「スコウタ神話」や、教皇庁での論争については常見信代, 2002, pp. 163-170.

内容である。しかし、この建国神話は修正を余儀なくされる。1286年にアレクサンダー3世が急逝すると、スコットランドでは王位継承問題が泥沼化し、これが結果的にイングランド王エドワード1世の介入を招いてスコットランド独立戦争(1296-1314)へと突入する。しかし、戦いは戦場だけではなく、教皇庁を舞台に1301年5月からイングランド王国代表がスコットランドに対する宗主権の根拠に「ブルートゥス神話」を持ち出し、スコットランド王国側は「スコウタ神話」で応戦するなど論争が続いた。そうした論戦のなかで、「スコウタ神話」ではスコットランド王はアイルランド王の従属王と解釈される恐れがでてきたからである。この結果、スコットランド王国の独立宣言とも言うべき「アブロウスの宣言」(1320)では、スコウタはスペインを経由して直接スコットランドに来たと主張し、スコットランドが独立の王国であることを示した¹¹⁰。

以上が中世のブリテンで展開した建国神話の概要である。こうした議論のなかでも、ケルト人が引き合いに出されることはいっさいなかった。ケルト人が「発見」されるのは、16世紀から18世紀の人文主義者によってであり、それぞれのネイションの起源をこのような他愛もない神話から解き放って、あらたな建国の歴史を書くなかでのことであった。

2) 「装飾写本」と「ケルト教会」

C.レンフルーの‘Celtic’の用例のなかに、「7. アイルランドで作成された装飾写本やその教会」とあるが、いずれもケルト人とはいっさい関係がない事項である。たとえば、『ダロウの書』(7世紀中葉)、『リンディス

¹¹⁰ スコットランドの建国神話は、『アイルランド侵入の書』や国王の系図をもとに独立戦争期前後の政治的駆け引きのなかで形を整えたと言うことができ、イングランドの「ブルートゥス神話」のようなストーリー性には欠けていた。これを達成したのがアバディーン司祭ジョン・オブ・フォーダンの『スコットランド人の年代記』(1370年代)で、さまざまな伝承・想像を織り交ぜて壮大な神話を創り出した。Fordun, Book I-Book II, pp. 1-81.フォーダンの年代記に収められた建国神話の問題点など詳しくは、Broun, 1999, ch. II pp. 11-32。

ファーンの福音書』（7世紀末-8世紀初め）、『ケルズの書』（9世紀初め）などの装飾写本は、かつては「ケルト芸術の傑作」と評された。しかし、これらの写本の装飾様式は、アイルランド人修道士がアイルランドだけでなくスコットランドやイングランドへのキリスト教伝道に深くかかわるなかで、各地のさまざまな様式を融合して生み出したものであり、現在は「島嶼芸術」Insular Artsと総称される¹¹¹。「ケルト芸術」のラベルが貼られたのは、19世紀の「ケルト復興」期である。

「ケルト教会」も同様である。これは16、17世紀の宗教改革期にアイルランドやスコットランドのプロテスタント系神学者らが唱えた考えに始まる。彼らは、ローマ教会からの分離を正当化する意図のもとで、中世初期のイングランドの教会とアイルランドやスコットランドの教会を対立的に捉え、自分たちの教会はローマからの福音伝道の前から存在したと主張したのである。この考え方は19世紀末-20世紀の歴史研究にも継承され、ローマ教会／イングランド教会とアイルランド・スコットランドの教会との違いが中世初期の教会史研究の中心テーマになり、'Celtic church'、'Celtic Christianity'なる概念が創出された。つまり、歴史上のケルト人とはまったく関係がないのである¹¹²。

3. 近代のケルト人

中世の西ヨーロッパでは忘れ去られる一方のケルト人であったが、各地の修道院の図書室には古代の著作の写本が数多く保管され、ケルト人に関する知識が埋もれていた。それを掘り起こしたのがルネサンスの潮流であり、これらの写本の多くが16世紀に活版印刷の形で広く利用できるよう

¹¹¹ 上述1頁参照。

¹¹² これらの概念に本格的な疑問が投げかけられ再検討が進んだのは20世紀末のことであるが、「ケルト教会」論は現在では否定されている。これについて詳しくは常見信代（2014）。

になった。タキトゥスの『アグリコラ伝』の写本が1476年頃にミラノで印刷され、カエサルの『ガリア戦記』はベネチアで1511年に出版されている¹¹³。17世紀初めまでに古代の著作の大半は、原語か翻訳で利用できるようになり、これがケルト人の「発見」につながったのである。

この時期は、それぞれのネイションの歴史に神話ではなく、事実に基づいた初期史を創りあげる必要に目覚めた時期でもあり、人文主義者あるいはイングランドでいうアンティークエリアン (antiquarians) の活動期と一致する。たとえば、ブリテンでは、ジョン・リーランド (1503-1552) が国中を旅して資料を集め、1586年にはウィリアム・カムデン (1551-1623) が著書『ブリタンニア』のなかでブリテンの初期史を本格的に取りあげた。そうしたなかで、ネイションの初期史をたどる方法の一つとして古代の著作に記された言語に目が向けられるようになった。ケルト人が発見されたのは、このような時代のなかであるが、古代のケルト人の言語と、当時まだ使われていた言語、つまり現在ケルト語と呼ぶ諸語とを結びつける学者はほとんどいなかった。16世紀にこれらの言葉が話されている地域以外では、ケルト語に関する知識は限られていたからであろう。

近代におけるケルト人の発見は、まず英語やフランス語とは異なる、ケルト語と呼ばれている言葉が日常的に話されていた地域の人文主義者によって始まった。しかし、方法論についての合意はなく、おもに古代の著作のなかの語彙の類似性を根拠に様々な分類や解釈が提起された。その最初とされているのが16世紀スコットランドのジョージ・ブキャナンであり、ついで18世紀初めのブルトン人ポール-イヴ・ペズロンとウェールズ人エドワード・スルウィッドであった。いずれも、イングランドやフランスというネイション・ステーツによって出身地域の文化とアイデンティティが脅かされていた時代の人であり、彼らの言語研究には自国ネイションがこれらの国に劣らず独自の歴史と言語を備えていることを認識させる意図もあった。したがって、特に言語や歴史を専門としたわけではなく、

¹¹³ Martin, 2009, p. 242; Cunliffe, 2018, p. 14.

いわゆる教養人であったが、結果としてこれら三人の業績は、古代の著作には存在しなかった「ケルト語」という概念とその論拠としての「ケルト人移住説」を生み出すことになり、20世紀の大半を支配してきた「ブリテン諸島のケルト語話者はケルト人」という定義の出発点になったのである。ここでは、「ケルト語」概念誕生の軌跡をたどる。

1) ジョージ・ブキャナン

ブキャナンは、1506年にスコットランド北西部、ロッホ・ローモンドの東にあるキラーン（Killearn）に生まれた。このあたりはスコットランドのなかで「ハイランド」と呼ばれ、ゲール語圏（ゲールタハト、Ghaeltacht）であるから、ブキャナンはゲール語を話すことができたと推測される。しかし、ブキャナンが後世に名を遺したのはハイランド人としてではない¹¹⁴。彼は、76年の生涯の30年以上をパリやボルドー、ポルトガルなど大陸で過ごし、なによりもラテン語詩人として、また古典学者としてヨーロッパで名声を博し、「16世紀のスコットランドが生んだ最高の知性」と評されている¹¹⁵。同時にブキャナンは、時代の政治・宗教問題にも深くかかわった。特に、パリ滞在中にスコットランド女王メアリの知遇を得て1560年に女王とともにスコットランドに帰国すると、プロテスタントであることを公言し、やがてメアリが不祥事を起こすと、それを機に反メアリ派に転じた。さらに、メアリが廃位され、その息子がジェームズ6世として王位を継承すると、ブキャナンは若き国王の教育係を務めるとともに、ジェームズのために二つの著作を著わした。

その一つが『スコットランド人における王権について』であり、国王は

¹¹⁴ 後述する『スコットランド史』（Buchanan, 1582, *Historia Rerum Scoticarum*, Book I, fol. 2）のなかでブキャナンは、「スコットランドの古い言葉〔ゲール語〕が徐々に衰え、この野蛮な音が少しずつ消え失せて、ラテン語の甘い響きに変まっているのを喜ばしく思っている」と書いている。

¹¹⁵ Caroline & Mason, 2012, pp. 1-10. ブキャナンの経歴や著作などについては、同書および Ferguson, 1998, ch. 5, pp. 79-95, Abbott, 2004.

その人民に責任を負い、国王がその責任を果たさないときには人民には暴君を廃位する権利があると論じて、プロテスタントの反乱とメアリ廃位の正当性を主張した¹¹⁶。この考えの正しいことを示すために、スコットランドの歴史を題材に民の意に背いた王の命運を説いたのが、『スコットランドの歴史』(全20巻)である。近代においてケルト人への最初の言及がなされたのは、この歴史叙述のなかであった¹¹⁷。

スコットランドの初期史を書くにあたってブキャナンが目にしたのは、古代の著作に記された地名がアイルランドやブリテンとガリアやスペインなどとの間で著しく似ていることである¹¹⁸。たとえば「町を意味する bria/briga/brica」(II.32)、「家の意味の magus」(II.33-34)、「村や町を意味する dun/dunum」(II.36)の要素を持つ地名で¹¹⁹、ブキャナンはそれぞれ 45, 21, 52 の例を洗い出して体系化した。当時としては例のない科学的な分析と言える。

同じような地名が認められる理由としてブキャナンは、ローマ以前の時期にガリアから人びとがアイルランドやブリテンへ侵入し移住したためと説明する。この説明の大前提となるのは、リウィウスやカエサル、タキトゥス、大プリニウスなどの著述をさまざまに接合して、ガリア人が現在のド

¹¹⁶ Buchanan, 1579, *De Jure regni apud Scotos*. ブキャナンの「抵抗権論」について、邦語文献として小林麻衣子(2002), pp.198-215; 同(2014), pp.48-69; ジョン・ガイ著、井内太郎訳(2010), pp.173-181。

¹¹⁷ ブキャナンの『スコットランド史』をガリア語やケルト語などブリテンやアイルランドの言語史の視点で分析した研究に Collis, 1999, pp. 91-107 (esp. Fig 2, p.98); Collis, 2003, pp. 34-44。

¹¹⁸ ブキャナンが地名の検証に使った著作のおもな著者は、Caesar, Strabo, Livy, Elder Pliny, Tacitus, Claudian, Ammianus Marcellinus, Dio Cassius, *The Antonine Itinerary*, Gildas, Bede (*Historia Ecclesiastica*), Gregory of Tours, William of Malmesbury, Hector Boece である。

¹¹⁹ カッコ内の意味はブキャナンの説明である。Sims-Williams (2006) によれば、'briga'は'hill, hillfort, town' (p.50), 'magus'は'field, plain' (p.87), 'dunum'は'enclosure, field'の意味である (p.73)。

イツやイタリアなど近隣諸国すべてに多数のコロニーを作り、そこから人びとを送り込んだという解釈である（II. 13, II. 26）。たとえば、ブリテンの住民（Brittones）の大部分が話すブリテン語（lingua Britannicae, Britannice）が、バルト海沿岸のガリア人コロニー「アエスティイ」（Aestii）の言語に近いのは、そこから人びとが移住したためとする（II.14）。これは、タキトゥスの『ゲルマニア』の一節（XLV）にある記述をガリア人コロニーに結びつけた推論である¹²⁰。さらに、ブリテンの南東沿岸部には、カエサル『ガリア戦記』V. 12を参考に、「大陸から移住したベルガエ人の子孫が住み、ベルガエ語を話す」という（II. 23）。一方、ピクト人は、「スキタイからという人もいればドイツからという人もいるが、いずれにしてもブリテンの東部に移住した」という（II. 19）。

他方でアイルランドとスコットランドについて、ブキャナンの話の骨子は次のようになる。スペイン北部にガリアのケルト人（Celtae）のコロニーがあり、彼らはこのコロニーから、まずアイルランドに渡り、「われわれの年代記によれば」、「その後フェルファの息子ファーガス」（Fergusius filius Fercardi）に率いられてブリテンに渡って、このファーガスが前330年にブリテンのスコット人の最初の王になった（II. 18, IV. 3）。また、これらのケルト人は、ケルト語（Celtica）を話し（II. 23, II. 25）、アイルランドでもブリテンでもスコット人（Scoti）と呼ばれたという（II. 17）。そのうえで、ブキャナンは、「ブリテンに住んでいた最古の三ネイション〔ブリトン人、ピクト人、スコット人〕の言語と慣習の起源は、すべてガリアにあり、ブリテンのいにしへの住民はガリア人に由来し、もともとガリア語を使っていた」と結論する。同時に、「ブリトン人はローマの将軍の軍門に降ったが、ピクト人とスコット人は独立を保ち、自分たちの王を守り続けた」と付記するのを忘れない（II. 37-38）。

ブキャナンはケルト人のアイルランド侵入とスコットランド移住の典拠を示していないが、その説明を読めば、古代や中世の著作と建国神話を混

¹²⁰ Tacitus, *Germania*, § xlv (pp. 206-207).

ぜ合わせた創作であることは明らかである。たとえば、スペイン経由でのアイルランド移住は、スコット人の始祖に関する『アイルランド侵入の書』を土台としており、ファーガスに関する「われわれの年代記」とは、14世紀後半のアバディーン司祭フォーダンの『年代記』をもとにしているのは明らかである¹²¹。しかし、それ以上にブキャナンの話は、かつての師ヘクター・ボウイスの『スコットランド史』第一巻に負うところが非常に大きいことは、よく知られているところである¹²²。

以上がブキャナンによって発見された「ケルト人」と「ケルト語」である。その意義をまとめれば、「ケルト語」(Celtica)という概念をはじめて創り出し、ブキャナンの時代にも一部の地方で話されていたアイルランドやスコットランドのゲール語をケルト語と定義したことにある。ただし、ブキャナンの「ケルト語」は限定的であり、今日のような「ガリア語」や「ゲール語」を束ねる「ケルト語派」という概念を創ったわけではない。「ケルト語」はあくまでも「ガリア語」の下位グループに置かれた。この問題をさらに深めて「ケルト語」概念を定式化したのは、次に紹介するペズロンとスルウィッドである。

同時にブキャナンは、ケルト研究に大きな負の功績を遺した。古代の著作家が誰も書いていないケルト人のアイルランドとブリテンへの移住を説いたことである。もちろん、これはブキャナンの責任ではない。問題は、ケルト人移住説に疑問を持つ研究者が皆無だったことにある。その結果、つい最近までケルト人移住説はアイルランドやスコットランドの言語と物質文化を説明するキーワードになっていたのである。『スコットランドの歴史』の冒頭で(I. 1)ブキャナンは、「われわれのいにしえの歴史を不確かなおとぎ話から解放し、忘却から救い出す」と書き、ジェフリ・オブ・モ

¹²¹ *Lebor Gabála Éirenn*, Part II. 114, pp. 22-25, Part V. 378-379, pp. 11-12; Fordun, II-12, p. 45.

¹²² ボウイスとブキャナンの著作の関係について, Ferguson, 1998, ch. 4, pp. 56-75.

ンマスのブルートゥス神話は古代のギリシア人もローマ人も誰も書いていないと批判するが（II. 27）、他方では根拠のない移住説を説き、さらに、神話上の人物にすぎない「フェルファの息子ファーガス」をスコットランド王国の始まりに置いた。要するに「おとぎ話」から抜け出ていないのである。しかし、これは時代の限界と言うこともできよう。今日から見てブキヤナンは、複雑な歴史の輪郭を描くなかでケルト諸語の血縁関係を明らかにしており、ケルト研究の礎を築いた人と評価されるが、ペズロンもスルウィッドもブキヤナンには触れなかったため、近代のヨーロッパでそのように認められることはなかった¹²³。

2) ポール-イヴ・ペズロン

その後のケルト語概念の形成に多大な影響を与えたのが、ポール・イヴ・ペズロン（1639-1706）である。ペズロンは、ブルターニュ出身の修道士で、シトー会の修道院長を務めた経歴を持つが、晩年は修道会を出て世界の起源とその言語に関する執筆に専念した。そうした作品の一つが、1703年にパリで出版された『ケルト人またの名はガリア人の民族と言語に関する故事来歴』（以下『故事来歴』）である。この作品は直後の1706年にロンドンで英語版が出版され、これがペズロンの所説が特にブリテンやアイルランドに広まり、ケルト人に関心が集まる背景の一つとなった¹²⁴。

¹²³ スルウィッドはブキヤナンを読んでいたと言われるが（Collis, 2017, p. 60）、著書のなかで言及することはなかった。他方でブキヤナンと同時代のイングランドにはアンティクエリアンの代表とされるカムデンが『ブリタニア』を書き、そのなかでブキヤナンに触れている。しかし、カムデンはケルト人には関心がなく、特別な講評はしていない。カムデンの関心はブリテン初期史のピクト人とブリトン人にあり、野蛮だった彼らがいかに文明化したかにあった。これはカムデン一人の関心ではなく、ウォルター・ローリーを中心にアイルランドのマンスター植民とアメリカ植民を主導したグループが共有する関心であった。カムデンはその一員であり、その視線の先には「帝国」があったと言える。これについては、続稿で検討したい。

¹²⁴ 原題は *L'antiquité de la nation et la langue des Celtes, autrement appelez*

『故事来歴』は全三巻からなり、第一巻では旧約聖書と古代の著作の枠組みを使ってケルト人 (Celtae) のルーツを次のように説明した。ケルト人のホームランドは洪水の後にノアの箱舟が上陸したアララト山からそう遠くないところにあり、ケルト人はノアの孫のゴメルを始祖とする。彼らは、小アジアから西へ西へと移動してギリシア人などを次々と征服、最後にガリアそしてブリテンにたどり着いたという。第二巻では、ギリシア語とラテン語そしてゲルマン語はケルト語 (Celtike) から派生したと主張し、第三巻はこれら諸語の語彙集となっている。ペズロンの結論に相当するのが、第二巻第7章の末尾の次の言葉である。

ブルトン人の言葉とウェールズ人の言葉は同じであり、それはカエサルとアウグストゥスの時代にガリア全土で話されていた言葉である。これについては証明の必要はない。したがって、ケルト語またはわれわれがブルトン語 (langue Bretonne) とも呼ぶガリア語は、始原語 (une langue Matrice) であり、世界で最も古い言葉である。…ギリシア人は、彼らが野蛮人と呼びつけた人びとからの言葉を取り入れて、ギリシア語の語彙を増やしたのである¹²⁵。

ペズロンの説明は、現在から見れば、歴史上の事実と聖書の神話とに

Gaulois。原題の邦語訳は森野聡子・菱川英俊、2017、p7による。D. Jones による英語版には原題に続いて副題 *taken to be originally the same people as our ancient Britains: containing great variety of historical, chronological, and etymological discoveries, many of them unknown both to the Greeks and Romans* が加えられ、これが読者を集めた要因の一つと思われる。ペズロンの経歴、作品については Davis, 2000, pp. xi-xviii ; Kidd, 1999, pp. 66-70 ; James, 1999, pp. 45-49 など。邦語文献は、原聖, 2007, pp.310-311 ; 森野聡子・菱川英俊, 2017, pp.5-16。

¹²⁵ Pezron, 1703, p. 336. 章立ては英語版だけで、ペズロンの原著にはないが、ここでは叙述の都合上、英語版の章立てを用いた。

独自のイマジネーションを加えた作り話であり、また、ブルトン語とウェールズ語の類似をケルト人がガリアからブリテンに移住したためと説明するなど多くの間違いを含んでいた¹²⁶。しかし、そのようなことを当時の人びとは知る由もなく、むしろペズロンの話は特にウェールズ人とブルトン人に誇りを与え、愛国心を鼓舞することになった¹²⁷。なぜなら、今でこそヨーロッパの西はずれで貧困に打ちひしがれているが、かつてはヨーロッパを支配したケルト人の子孫であり、彼らの言葉は祖先がヨーロッパを支配していた時代の証明であると説明したからである。

こうして、ウェールズ人とブルトン人は、ポスト・ローマ期に移住してきたフランク人やアングロ・サクソン人よりも先に来た人びととされ、ケルト人の子孫であるウェールズ人とブルトン人こそがフランス人とイギリス人の直接の祖先と位置づけられた。『故事来歴』の英語版は1809年、1812年になっても出版されている¹²⁸。反響の大きさを示している。

ペズロンは、ケルト語の中にアイルランドとスコットランドのゲール語を加えなかった。現在の言語分類では、ケルト諸語は印欧語族のなかのケルト語派に属し、ケルト語派はさらに大陸ケルト語群と島嶼ケルト語群に分けられる。ペズロンが検討したウェールズ語やブルトン語は、現在では後者のなかのブリトン語系（Brythonic, Brittonic）に分類されるが、島嶼ケルト語群のグループには、もう一つ、アイルランドやスコッ

¹²⁶ ブルトン語はローマ末期からポスト・ローマ期初期にウェールズから、特にコンウォールから導入されたというのが定説である。トーマス・チャールズ・エドワーズ、常見信代監訳、2010、pp.9-11。

¹²⁷ ペズロンの英語版は、イングランドとの合邦（1707）を控えたスコットランドにも影響を与えた。この問題については、「ケルト復興」で検討する。

¹²⁸ ウェールズ人をケルト人の子孫とするペズロンの考えは、ウェールズでもTheophilus Evanのウェールズ語によるウェールズ初期史*Drych y Prif Oesoedd*（‘A Mirror of the First Ages’；Yr Amwythig, 1716, 2nd ed. 1740（その後も重版）を通して広く知られるようになり、ウェールズ・ナショナリズムに影響を与えた。

トランドのゲール語を含むゲール語系諸語 (Goideric, Gaelic) がある。これらをケルト語のなかに加えたのは、ベズロンとほぼ同じころに出版された、エドワード・スルウィッドの『ブリテン考古学』(1707)が最初である。

3) エドワード・スルウィッド

スルウィッドは、1660年頃にイングランドとウェールズの国境に近いオスウェストリーに生まれた¹²⁹。現在ではもっぱらケルト語研究の父祖に位置づけられるスルウィッドであるが、この評価はかならずしも正確ではない。スルウィッドは1682年にオックスフォード大学に入学したが、言語学を生涯の目標としたわけでも、また、その最大の作品である『ブリテン考古学』も言語学の専門書を目指したわけでもない。スルウィッドが後世に名前を遺すことになった最大の理由は、入学したオックスフォード大学における学問の潮流とそこでの人脈形成にある。

当時のオックスフォード大学は、17世紀科学革命の拠点の一つであり、スルウィッドはジーザス・カレッジに籍を置いて自然科学や植物学を専攻し、各地を回って植物化石の採取と分類・標本づくりに携わっている。こうした教育を通して自然科学の客観性、つまり証拠をもって事実を確定する研究方法を習得したのである¹³⁰。もう一つ重要なのは、当時のオックスフォード大学の自然科学者の多くが地方の自然史だけでなく、遺跡・遺物、その土地の言語や歴史をも調査・研究の対象としたことである。つまり、彼らはカムデンらの地誌 (chorography) の伝統を引き継ぐアンティークエリアンであり、カムデンの時代との違いは、自らも足を運んで実地調査す

¹²⁹ スルウィッドの経歴については、Roberts 2004; Considine 2017, ch. 14, pp. 121-126。邦語では、森野聡子 (2017), pp.17-26。'Lhuyd'は日本では「ルイド」と表記されることが多いが、本稿では森野氏に従って「スルウィッド」と記す。

¹³⁰ 在学中にスルウィッドが作成した植物化石の標本の一部がオックスフォード大学自然史博物館に収蔵されている。<http://www.oum.ox.ac.uk/learning/pdfs/lhwyd>。

るだけでなく対象とする地域の司祭や教師，地主などの有力者に地域の現在と過去に関する調査票を送付する方法を用いたことにある¹³¹。これによって地誌の伝統に神話や権威に頼らない科学性が加味されたのである¹³²。

スルウィッドは、この潮流のなかで学生時代を過ごし、そこで築いた人脈をもとにその後の経歴を積み上げていった。たとえば、アンティークエリアンとして最初の仕事がカムデンの『ブリタンニア』の改訂版への参加であり、ウェールズ部分の修正と補足（Additions）を担当したことであるが、この改訂版を企画したエドモンド・ギブソンは、スルウィッドの在学中の1686年にオックスフォード大学に赴任し、『サクソン年代記』の対訳版を出版するなど大学におけるアングロ・サクソン研究の中心となった人物である。このように在学中に築いた自然科学と人文学の素養と人脈とが、博学者スルウィッドを育てたとと言える¹³³。

E.ギブソンの依頼を受けてスルウィッドは、『ブリタンニア』のウェールズ部分の修正・増補を担当するために、自らウェールズに赴いて実地調査するだけでなく、各地域の郷土史や民俗、遺跡、遺物に詳しい人物に調査票を送って情報を収集し、『ブリタンニア』の改訂版は1695年に刊行され

¹³¹ 1687年頃にスルウィッドは開設したばかりのオックスフォードのアシュモリアン博物館に入り、館長ロバート・プロットの助手を務めるが、プロットは1674年に22の項目からなる調査票を印刷してオックスフォード州とスタッフォード州に送付するとともに自身も現地に入って調査し、これらの情報をもとに二つの州の『自然史』を出版した。Plot, 1677; 1686. またプロットの調査票が他の調査の見本になった例やイングランドだけでなくアイルランドやスコットランドにも調査票の例があり、この調査方法はすでに確立されていた。Fox, 2010, pp. 597-602.

¹³² この潮流をFoxらは、1620年代にフランシス・ベーコンが提唱した人間の歴史と自然の歴史の融合と評する。Fox, 2010, p. 595.

¹³³ オックスフォード時代のスルウィッドについて詳しくはEdwards, 2007, pp. 166-69; Emery, 1958, pp. 179-182.

た¹³⁴。しかし、スルウィッドの調査はこれで終わらなかった。単著『ブリテン考古学』を出版することになったのである。

この出版を実現するためにスルウィッドは、調査旅費や出版経費を賄うために、「企画書」を印刷して広く予約を募っている¹³⁵。当時としては革新的な手法であった。企画書によれば、『ブリテン考古学』は全四巻からなり、第一巻がウェールズ語とギリシア語、ラテン語、コンウォール語、ブルトン語との比較、第二巻はブリテン諸島の慣習・伝統の他の国々との比較、第三巻はウェールズに残る記念碑や遺跡について、第四巻はローマの遺物およびその後のブリトン人支配下の遺物について、さらに、別巻として5章からなるウェールズの自然史になっている。おそらくスルウィッドは、カムデンが深く扱わなかったウェールズやスコットランドなどケルト語圏を中心に、『ブリタニア』の続編を考えていたと思われる。スルウィッドは、この構想を実現するために第二弾として、当時すでに定着していた調査方法を使って、ウェールズのすべての教区宛に31項目の質問からなる調査票を配布している(図8)¹³⁶。そのうえで、4年をかけて故郷のウェールズだけでなくブルターニュ、コンウォール、アイルランド、スコットランドの島嶼部にまで足を運び、自ら資料収集にあたった¹³⁷。

¹³⁴ Camden's *Britannia*, 1695, pp. 583-702.

¹³⁵ Lhuys, E. 1695, *A design of a British dictionary*.スルウィッドの企画と調査方法の革新性について、詳しくは Yale, 2016, pp. 186-204.

¹³⁶ Lhuys, 1697, *Parochial Queries*.内容は、地域独自の語彙など言語に関する質問もあるが、教区名とその由来、古文書の所有者や自然など、ほとんどが教区内の聖職者、教師、地主などが返答しやすい質問であり、各質問の下に返答欄が設けられ、そのまま返送するようになっている。なお、Considine (2017, p.125)によれば、4000部を印刷してウェールズのすべての教区(各3部)に送り、返答が143教区について残っている。回収率15%であるが、実際にはもっとあったが、散逸してしまったと思われる。

¹³⁷ スルウィッドの調査旅行について Considine, 2017, ch. 15, pp.127-136。スコットランドのハイランドやアイルランドでの語彙収集や発音調査については、「ケルト復興」で検討したい。

図8 教区宛調査票



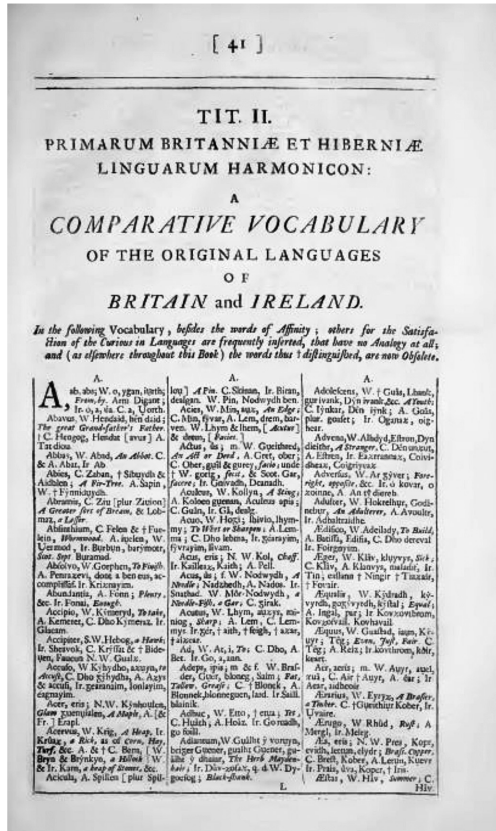
出典 Yale, 2016, p. 195.

その成果が1707年に刊行された『ブリテン考古学』の第一巻である¹³⁸。企画書ではこの2年後に第二巻を出す予定だったが、その年に死亡して壮大な構想の『ブリテン考古学』は第一巻で終わり、実質的には語彙注釈書からなる *Glossography* だけが残された。スルウィッドの考察対象となった言語と語彙は、ブリテンとアイルランドの'original Languages'であるが、これはラテン語でも英語でもない。スルウィッドにとってブリテンの始原語とは、ウェールズ語であり、アイルランドとスコットランドのゲール語 (Goidelic) であり、コンウォール語であり、アルモリカ語 (Armoric, ブルトン語) であった (図9)。ブリテンとアイルランドの言語は、これらの地域の人びとの言語に始まるというのである。その理由は、彼らが先に移住してきたからである。

第一巻は序文と全10の章からなり、各章の内容は次のとおりである。

¹³⁸ Lhuyd, 1707, *Archaeologia Britannica*, Vol. 1, *Glossography*.

図 9 第二章「ブリテンとアイルランドの始原語の比較」



出典：Archaeologia Britannica, Vol. 1, Glossography, p. 41.

- I. 上記の 4 言語と英語とラテン語, ギリシア語の語彙の語源の比較
- II. ブリテンとアイルランドの始原語 (4 言語) の語源の比較
- III. アルモリカ語の文法
- IV. アルモリカ語-英語の語彙の照合
- V. デイヴィス博士の辞典が取り上げなかったウェールズ語の語彙
- VI. コンウォール語文法
- VII. ブリテンの古写本の目録
- VIII-1. アシュモリアン博物館・館長スルウィッドの助手 D. パーリーイ氏

によるブリトン語 (British) の語源について：ウェールズ語とギリシア語・ラテン語その他ヨーロッパ言語との照合

- 2. ブリトン語 (British) の語源について

IX. アイルランド語・古スコットランド語〔ゲール語〕解説

X. ゲール語-英語辞典；アイルランド語写本の目録

このように、第一巻は最初期からスルウィッドの時代までに話されていた、ほぼすべての言語に関する語彙集であり、注釈書である。特に、注目にされるのが、ウェールズ語やゲール語について、語源だけでなく発音が細かく記されていることである。単に文献からだけでなく、これらの地域でまだ広く話されている言語を現地調査した、たまものと言えよう。

スルウィッドがケルト語研究に遺した功績として、第一にあげられるのは、ウェールズ語を含む4言語を包括的に「ケルト語」'Celtic'と呼んだことである。ペズロンは、ウェールズ語とブルトン語の類似を指摘してケルト語と呼んだが、アイルランドとスコットランドのゲール語を加えることはなかった。したがって、スルウィッドによってはじめて、これらの地域の言語が一つのグループ（現在でいう島嶼ケルト語群）にまとめられたのである。ただし、スルウィッド自身は、'Celtic'を特に強調しているわけではない¹³⁹。強調されたのは、これら4言語相互の比較による類似と相違であり、章立てからわかるように、ウェールズ語とコンウォール語、アルモリカ語を一つのグループ（Ⅱ～Ⅷ）に、アイルランド語とスコットランド・ゲール語を別のグループに分けているのである（Ⅸ～Ⅹ）。

¹³⁹ 'Celtic'が用いられているのは、第一巻全472頁のなかで序章（頁表記なし）7回、8章（p.285）、10章（p.312）だけである。スルウィッドは第一巻でペズロンに言及しており、また、ペズロンとの面会を望んだとも言われるから、ペズロンの著書を読んでいたことは確かである。ちなみにJames（1999, p. 45）がボードリアン図書館でペズロンの著書にスルウィッドの書き込みがあるのを見ている。したがって、これらの諸語を束ねる包括語を'Celtic'としたのは、ペズロンの影響かもしれない。

これがスルウィッドのケルト語研究における第二の功績にあげられ、この分類は後の言語学者によってQケルト語とPケルト語と命名されることになる。しかし、スルウィッドは第一巻のなかでこの分類の根拠を説明していない。それがわかるのは第一巻のウェールズ語版への序文および生前に友人に宛てた書簡からである¹⁴⁰。それによれば、ペズロンのモデルを拡大してケルト人は二つの波でブリテンとアイルランドに移住したと考えていたようである。第一波はアイルランドとスコットランドへの移住で、これが、よりアルカイックな形式のケルト語をもたらし、第二の波がケルト語をウェールズとコンウォールにもたらしたという。

以上が、『ブリテン考古学』第一巻の概要と、その評価である。同時代のペズロンがとりとめのない推論を繰り返したのに比べ、スルウィッドの実証的で緻密な論理は現代の評論家から多大な称賛を受け、ケルト諸語を論じる際にはかならず取り上げられてきた。『ブリテン考古学』第一巻はケルト語研究のランドマークとされてきたのである。しかし、18-19世紀の研究者にはスルウィッドの方法論は理解されず、彼の発見したことはしばしば疑問視されることになった¹⁴¹。時代を先に進みすぎたのであろう。

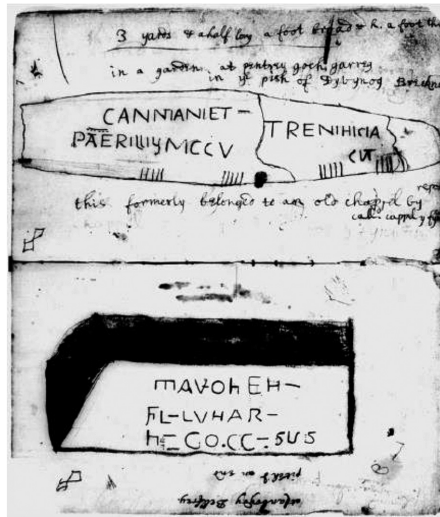
スルウィッドの功績は言語学の分野に限らない。たとえば、第一巻には文法だけでなく、語彙の綴り方や古文書の読み方などの解説も随所にあり、なじみのない言語資料を研究で使いたいと望む歴史家やアンティークエアアの入門書を意図していたと推測される。

スルウィッドが第二巻に構想していた「慣習と伝統に関するブリテン諸島の人びと他の国々の人びとの比較」はついに陽の目を見なかったが、各地で実施した調査のメモが大量に残された。このメモを分析したB. F. ロバーツは、スルウィッドが広い範囲にわたって各地に残る慣習や儀礼について、伝説や人びとの曖昧な話に頼らず、自ら体系的に情報を収集して批

¹⁴⁰ Gunther, 1968 (rep.), pp. 490-491 (Letter to Mr. Babington, 1703); 森野聡子, 2017, p.19.

¹⁴¹ Davis, 2000, pp. ix-xi.

図 10 スルウィッドのウェールズ調査メモ



上段：オガム文字とローマ文字を併用した墓碑銘のメモ
下段：ローマ文字の墓碑銘のメモ

出典：Edwards, 2007, p. 170.

判的な分析を記録していたことを明らかにし、民俗学の最高のパイオニアと称える。考古学者N.エドワーズも、スルウィッドをケルト考古学のパイオニアと称える。それは、スルウィッドがウェールズはもとよりスコットランドやアイルランド、コンウォール各地を調査して歩く際に、初期キリスト教会の跡や各地に散在した石柱十字架を刻んだ石などを克明に記録したからであり、これらは今では存在したことすらわからなくなった教会や判読できなくなった墓碑銘の貴重な研究史料となっているからである（図10）¹⁴²。

スルウィッドの調査は、さらに重要な功績を遺した。自身による各地での聞き取りや教区の名士らへの調査依頼そして有志への資金提供の呼びかけは、各地の伝統文化が失われつつあるときに地域住民の間に地域の歴史

¹⁴² Roberts, 2009, pp. 43-52 ; Edwards, 2007, pp. 186-188.

や遺跡、遺物への関心を引き起こしたことである。これが結果的に愛郷心を育み、郷土史家を育てて、18-19世紀の考古学の盛況と「ケルト復興」の土壌の一つとなったのである。

こうして、ブキャナン、ペズロン、スルウィッドによって、ウェールズやアイルランド、スコットランドのハイランドやブルターニュで人びとが話す、英語やフランス語ではない言葉は「ケルト語」と認定され、これらの言葉を話す人びとが「ケルト人の子孫」と認識されるようになったのである。さらに「ケルト人の子孫」は、ポスト・ローマ期に北西ドイツから移住してきたゲルマン系のイングランド人よりも先に来た人びとであるという誇りをも生み出した。これが18-19世紀のロマン主義とナショナリズムの潮流のなかで、「ケルト人」と「ケルト的なるもの」への関心と憧憬を招き、「ケルト復興」をもたらした背景である¹⁴³。

以上が、「ケルト語」概念成立の歴史である。このような過程を経て、'Celtic'に「ケルト語」という意味が、つまりC.レンフルーのあげた用例の第三が加わったのである。

引用文献

- Abbott, D. M. 2004, 'Buchanan, George (1506-1582)', *Oxford Dictionary of National Biography*, [http://www.oxforddnb.com/view/article/3837, accessed 21 June 2019].
- Allentoft, M. E. et al. 2015, 'Population Genomics of Bronze Age Eurasia,' *Nature*, 522, pp. 167-72.
- Anthony, D. 1986, 'The "Kurgan Culture," Indo-European Origins, and the Domestication of the Horse: A Reconsideration', *Current Anthropology* 27: 291-313.
- Anthony, D. 2007, *The Horse, The Wheel, and Language: How Bronze Age Riders from the Eurasian Steppes Shaped the Modern World*, Princeton and Oxford.

¹⁴³ 18-19世紀の考古学の展開と「ケルト復興」は、続稿で検討する。

- Aristotle, *Meteorologica*, trans. by H. D. P. Lee, Loeb Classical Library 397, Cambridge, MA, 1952；アリストテレス著，三浦要・金澤修訳『気象論』『宇宙について』，岩波書店，2015.
- Aristotle, *Politics*, trans. by H. Rackham, Loeb Classical Library 264, 1932；アリストテレス著，神崎繁・相澤康隆・瀬口昌久訳『政治学 家政論』，岩波書店，2018.
- Arrian, *Anabasis of Alexander I, Volume I: Books 1-4*, trans. by P. A. Brunt, Loeb Classical Library 236, Cambridge, MA, 1976.
- Athenaeus, *The Learned Banqueters, Volume II: Books 3.106e-5*, ed. and trans. by S. Douglas Olson, Loeb Classical Library 208, Cambridge, MA, 2007；アテナイオス著，柳沼重剛訳『食卓の賢人たち』京都大学学術出版会，西洋古典叢書，1998.
- 青山吉信，1985『アーサー伝説：歴史とロマンスの交錯』岩波書店.
- Barney, S. A. et al, 2006, *The Etymologies of Isidore of Seville*, Cambridge.
- Bede, *Bede's Ecclesiastical History of the English People*, ed., B. Colgrave and R. A. B. Mynors, Oxford, 1969.
- Braun, Th. 2004. 'Hecataeus' Knowledge of the Western Mediterranean', in *Greek Identity in the Western Mediterranean: Papers in Honour of Brian Shefton*, ed., by Kathryn Lomas, Boston, pp. 287-347.
- Broun, D. 1999, *The Irish Identity of the Kingdom of the Scots in the 12th and 13th Centuries*, Woodbridge.
- Brown, P. 2012, *Through the Eye of a Needle: Wealth, the Fall of Rome, and the Making of Christianity in the West, 350-550 AD*, Princeton.
- Buchanan, G. 1579, *De Jure regni apud Scotos*; trans. by Robert MacFarlan (1799), *A Dialogue Concerning the Rights of the Crown in Scotland*.
- Buchanan, G. 1582, *Historia Rerum Scoticarum*, Edinburgh; trans. by James Aikman (1827), *The History of the Scotland*, 4vols, Glasgow.
- バルター，M. 2016，「言語学バトル；印欧語族の起源をめぐって」『日経サイエンス』46（9），日経サイエンス社，84-90.
- Caesar, *The Gallic War*, trans. by H. J. Edwards, Loeb Classical Library 72. Cambridge, MA, 1917.
- Camden, 1695, *Camden's Britannia newly trans. into English, with large additions and improvements*; publish'd by Edmund Gibson, London: Printed by F. Collins, for A. Swalle and A. and J. Churchil, 1695. <http://name.umdl>.

- umich.edu/B18452.0001.001
- Caroline, E. and R. A. Mason, 2012, 'George Buchanan: Influence, Legacy, Reputation', in *George Buchanan: Influence, Legacy, Reputation*, ed. by Caroline and Mason, London.
- Cassidy, L. et al, 2016, 'Neolithic and Bronze Age migration to Ireland and establishment of the insular Atlantic genome', *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*, pp. 368-373.
- Celestino, S. and López-Ruiz, C. 2016, *Tartessos and the Phoenicians in Iberia*, Oxford.
- Collis, J. R. 1999, 'George Buchanan and the Celts of Britain', in Black, R., Gillies, W. and Maolalagh, R. Ó (eds.), *Celtic Connections*, Vol. 1. *Proceedings of the Tenth International Congress of Celtic Studies*, East Linton, pp. 91-107.
- Collis, J. R. 2003, *Celts: Origins, Myths and Inventions*, Stroud.
- Collis, J. R. 2014, 'The Celts: More myths and inventions', in *Fingerprinting the Iron Age: Approaches to Identity in the European Iron Age: Integrating South-Eastern Europe into the debate*, Cătălin Nicolae Popa and Simon Stoddart (eds.), Oxford, pp. 291-305.
- Collis, J. R. 2017, 'Celts, Ancient and Modern: Recent Controversies in Celtic Studies', *Studia Celtica Fennica*, Vol. 14, pp. 58-71.
- Considine, J. 2017, *Small Dictionaries and Curiosity Lexicography and Fieldwork in Post-Medieval Europe*, Oxford.
- Cardoso, J. L. 2014, 'Absolute Chronology of the Beaker Phenomenon North of the Tagus Estuary: Demographic and Social Implications', *Trabajos de Prehistoria*, 71, pp. 56-75.
- Cunliffe, B. 1992, *The Celtic World*, London ; バリー・カンリフ著, 蔵持不三也監訳『図説ケルト文化誌』, 原書房.
- Cunliffe, B. 1997, *The Ancient Celts*, Oxford.
- Cunliffe, B. 2001, *Facing the Ocean: The Atlantic and its Peoples 8000 BC-AD 1500*. Oxford.
- Cunliffe, B. 2002, *Extraordinary Voyage of Pytheas the Greek*, London, Penguin Books.
- Cunliffe, B. 2003, *The Celts: A Very Short Introduction*. Oxford.
- Cunliffe, B. 2010, 'Celticization from the West: The Contribution of Archaeology', in *Celtic from the West: Alternative Perspectives from*

- Archaeology, Genetics, Language and Literature*, eds. B. Cunliffe and J. T. Koch, Oxford, pp. 13-38.
- Cunliffe, B. 2012, *Britain Begins*, Oxford.
- Cunliffe, B. 2017, *On the Oceans: The Mediterranean and the Atlantic from prehistory to AD 1500*, Oxford.
- Cunliffe, B. 2018, *The Ancient Celts*, second edition, Oxford.
- Cunliffe, B. 2019, 'Setting the Scene', in Koch, J. T. and Cunliffe, B. eds. *Exploring Celtic Origins, New Ways Forward in Archaeology, Linguistics, and Genetics*, Oxford.
- キャンベル, K.L. and ホフライター, M. 2013「進化：眠りから覚める古代 DNA」『日経サイエンス』43 (4), 日経サイエンス社, 78-85.
- Davis, D. R. 2000, 'The Introduction', in *Celtic Linguistics, 1700-1850: The antiquities of nations*, pp. i-xxv. London.
- Dietle, M. 2010, *Archaeologies of Colonialism: Consumption, Entanglement, and Violence in Ancient Mediterranean France*, Berkeley: CA.
- Diodorus Siculus, *Library of History, Volume III: Books 4.59-8*, trans. by C. H. Oldfather. Loeb Classical Library 340, Cambridge, MA, 1939 ; デイオドロスほか著, 飯尾都人訳編『デイオドロス神代地誌：ポンポニウス・メラ「世界地理」；プルタルコス「イシスとオシリス」』, 龍溪書舎, 1999.
- Duffy, P. 1997, 'Writing Ireland: literature and art in the representation of Irish place', in B. Graham (ed.) *In Search of Ireland: a Cultural Geography*, London, pp. 64-83.
- Edelstein, L. and I. G. Kidd (eds.), 1989, *Posidonius V. 1: The fragments*, Cambridge.
- Edwards, N. 2007, 'Edward Lhuyd and the Origins of Early Medieval Celtic Archaeology', *The Antiquaries Journal*, 87, pp 165-196.
- Emery, F. 1958, 'Edward Lhuyd and the 1695 Britannia', *Antiquity*, Vol. 32-127, pp. 179-182.
- Farley, J. & Hunter, F. 2015 (eds.), *Celts: Art and Identity*, London.
- Ferguson, W. 1998, *The Identity of the Scottish Nation: An Historic Quest*, Edinburgh.
- Fernández-Götz, M, 2016, 'Celts: art and identity' exhibition: "New Celticism" at the British Museum', *Antiquity*, 90, pp 237-244.
- Fox, A. 2010, "Printed Questionnaires, Research Networks and the Discovery of

- the British Isles, 1650–1800." *Historical Journal*, 53, pp. 593–621.
- Fordun, Johannis de, *Johannis de Fordun, Chronica Gentis Scotorum*, ed. by W. F. Skene, Edinburgh, 1871.
- Freeman, Ph. 2001, *Ireland and the Classical World*, Austin.
- Freeman, Ph. 2006, *The Philosopher and the Druids: A Journey Among the Ancient Celts*, New York.
- Geoffrey of Monmouth, *History of the Kings of Britain*, trans. by Aaron Thompson with revisions by J. A. Giles. In parentheses Publications, Medieval Latin Series, Cambridge, 1999.
- Ghezal, S. et al. 2019, 'Embalmed heads of the Celtic Iron Age in the south of France', *Journal of Archaeological Science*, Volume 101, January, pp. 181–188.
- Gimbutas, M. 1956, *The Prehistory of Eastern Europe*, Part 1, Cambridge.
- Grahame, C. 1966, 'The Invasion Hypothesis in British Archaeology', *Antiquity*, 40 (159), pp. 172–89.
- Griffin, M. T. 2009, 'Tacitus as a historian', in *The Cambridge Companion to Tacitus*, ed. by Woodman, A. J., Cambridge, pp. 168–183.
- Gruen, E. S. 2011, *Rethinking the Other in Antiquity*, Princeton; NJ.
- Gunther, R. T. 1968 (rep.), *Life and Letters of Edward Lhwyd: Early Science in Oxford*, xiv, Oxford.
- 後藤篤子, 1982 「シドニウス＝アポリナリスにおける“ローマニズム”」『史学雑誌』91–10, 1513–1551.
- Haak, et al. 2015, 'Massive migration from the steppe is a source for Indo-European languages in Europe', *Nature*, 522, pages 207–211.
- Harries, J. 1994, *Sidonius Apollinaris and the Fall of Rome, AD 407–485*, Oxford.
- Haywood, J. 2001, *The Historical Atlas of the Celtic World*, London ; ジョン・ヘイウッド著, 井村君江監訳『ケルト歴史地図』東京書籍, 2003.
- Haywood, J. 2014, *The Celts: Bronze Age to New Age*, New York.
- Herodotus, *The Persian Wars, Volume I: Books 1–2*, trans. by A. D. Godley. Loeb Classical Library, 117, Cambridge, MA, 1920.
- Herodotus, *The Persian Wars, Volume II: Books 3–4*, trans. by A. D. Godley, Loeb Classical Library 118, Cambridge, MA, 1921.
- Herodotus, *The Persian Wars, Volume III: Books 5–7*, trans. by A. D. Godley. Loeb Classical Library 119. Cambridge, MA, 1922 ; ヘロドトス著, 松本千秋

- 訳『ヘロドトス 歴史全3冊』（ワイド版岩波文庫），岩波書店，2008.
Historia Brittonum, in *British history, and The Welsh annals*, ed. and trans. by
John Morris, London, 1980, pp. 50-84.
- Hoz, J. de. 1992, 'The Celts of the Iberian Peninsula', *Zeitschrift für celtische
Philologie*, 45, pp. 1-37.
- 原聖，2007『ケルトの水脈』（興亡の世界史07），講談社。
- 原聖，2012「ケルト諸語文化の復興，その文化的多様性の意義を探る」，原聖（編）
『ケルト諸語文化の復興』（『ことばと社会』別冊4），三元社，pp.5-43.
- Isidorus Hispaliensis, *Etymologiarum Libri Viginti*, IX. 114, *Patrologia Latina
Migne* 82.
- James, S. 1993, *Exploring the World of the Celts*, London；サイモン・ジェームズ
著，井村君江監訳，『図説ケルト』東京書籍，2000.
- James, S. 1999, *The Atlantic Celts, Ancient People of Modern Invention?*,
London.
- Jeunesse, Ch. 2014, 'The Dogma of the Iberian Origin of the Bell Beaker:
Attempting its Deconstruction', *Journal of Neolithic Archaeology*, 16, pp.
158-166.
- Justinus, 1997, *Justin: Epitome of the Philippic History of Pompeius Trogus*, Vol.
1, trans. by J. C. Yardley and commentary by W. Heckel, Oxford.
- Justinus, *EPITOMA HISTORiarum PHILIPPICARUM POMPEII TROGI*；ボンペイウス・
トログス著，ユニアヌス・ユステイヌス抄録，合阪學訳『地中海世界史』京
都大学学術出版会，西洋古典叢書，1998.
- ジョン・ガイ著，井内太郎訳，2010「君主制と助言制度——国家の諸形態」，パ
トリック・コリンソン編・井内太郎監訳『オックスフォードブリテン諸島史
6：16世紀 1485年—1603年』慶應義塾大学出版会，153-196所収。
- Karl, R. 2010, 'The Celts from Everywhere and Nowhere: A Re-Evaluation of
the Origins of the Celts and the Emergence of Celtic Cultures', in Koch, J. T.
and Cunliffe, B (eds.), *Celtic from The West*, pp. 39-64.
- Kendall, C. B. 2010, 'Bede and education', in Scott DeGregorio ed. *Cambridge
Companion to Bede*, Cambridge, pp. 99-112.
- Kent, A. M. 2002, 'Celtic Nirvanas: Constructions of Celtic in contemporary
British youth culture', in D. C. Harvey et al. (eds.), *Celtic Geographies: Old
Cultures, New Times*, London, pp. 208-226.
- Kidd, C. 1999, *British Identities before Nationalism: Ethnicity and Nationhood in*

- the Atlantic World, 1600-1800*, Cambridge.
- Klejni, L. S. et al. 2017, 'Discussion: Are the Origins of Indo-European Languages Explained by the Migration of the Yamnaya Culture to the West?', *European Journal of Archaeology* 21 (01), pp. 1-15.
- Kneafsey, M. 2002, 'Tourism Images and the Construction of Celticity in Ireland and Brittany', in D. C. Harvey et. al. eds. *Celtic Geographies: Old Cultures, New Times*, London, pp. 123-137.
- Koch, J. (ed.), 2006, *Celtic Culture: A Historical Encyclopedia*, Santa Barbara: California.
- Koch, J. T. 2009, *Tartessian Celtic in the South-west at the Dawn of History*, Aberystwyth.
- Koch, J. T. 2010, 'Paradigm Shift? Interpreting Tartessian as Celtic' in Koch, J. T. and Cunliffe, B. eds. *Celtic From The West*, pp. 185-301.
- Koch, J. T. 2014, 'Once again, Herodotus, the Κελτοί, the source of the Danube, and the Pillars of Hercules', in *Celtic Art in Europe: Making Connections Essays in honour of Vincent Megaw on his 80th birthday*, ed. by Ch. Gosden et al. Oxford, pp. 6-18.
- Koch, J. T. with F. Fernandez, 2019, 'A case of identity theft? Archaeogenetics, Beaker People, and Celtic Origins' in Koch, J. T. and Cunliffe, B. (eds.), *Exploring Celtic Origins*, pp. 38-79.
- Koch, J. T. and Cunliffe, B. eds.. 2010, *Celtic from The West, Alternative Perspectives from Archaeology, Genetics, Language and Literature*, Oxford.
- Koch, J. T. and Cunliffe, B. eds.. 2013, *Celtic From The West 2, Rethinking the Bronze Age and the Arrival of Indo-European in Atlantic Europe*, Oxford.
- Koch, J. T. and Cunliffe, B. eds. 2016, *Celtic From The West 3, Atlantic Europe in the Metal Ages: Questions of Shared Language*, in collaboration with Kerri Cleary and Catriona D. Gibson, Oxford.
- Koch, J. T. and Cunliffe, B. eds. 2019 *Exploring Celtic Origins, New Ways Forward in Archaeology, Linguistics, and Genetics*, Oxford.
- 栗田伸子・佐藤育子, 2016『興亡の世界史 通商国家カルタゴ』(講談社学術文庫), 講談社(初版2009)。
- 小林麻衣子, 2002「ジョージ・ブキャナンの抵抗権論」『一橋論叢』127-2(2002), 198-215.
- 小林麻衣子, 2014『近世スコットランドの王権—ジェイムズ六世と「君主の鑑」』

- ミネルヴァ書房, 2014.
- Lapidge, M. 2005, *Anglo-Saxon Library*, Oxford.
- Lazaridis, I. et al. 2016, 'Genomic insights into the origin of farming in the ancient Near East', *Nature* 536, pp. 419-424.
- Lebor Gabála Éirenn: The Book of the Taking of Ireland*, Part II, London (Irish Text Society), 1993 (rep. with New Introduction); Part V, London, 1956, Irish Text Society, ed. by R. A. S. MacAlicster.
- Leland, J. 1544, *Assertio inclytissimi Arturii regis Britannia*, trans. by Richard Robins (1582), *A Learned and True Assertion of the original, Life, Actes, and death of the most Noble, Valiant, and Renoumed Prince Arthure*, King of Great Brittain.
- Lhuyd, E. 1695, *A design of a British dictionary, historical and geographical with an essay, entitled, Archæologia Britannica: and a natural history of Wales*, by Edward Lhwyd, keeper of the Ashmolean repository, Oxon; <http://name.umdl.umich.edu/A48366.0001.001>
- Lhuyd, E. 1697, *Parochial Queries in Order to a Geographical Dictionary, a Natural History & c. of Wales*, Oxford?; <https://quod.lib.umich.edu/e/eebo/A48368.0001.001?view=toc>
- Lhuyd, E. 1707, *Archæologia Britannica*, Vol. 1, *Glossography*, Oxford.
- Livy, *History of Rome, Volume III: Books 5-7*, trans. by B. O. Foster, Loeb Classical Library 172, Cambridge, MA, 1924.
- Livy, *History of Rome, Volume IV: Books 8-10*, trans. by B. O. Foster, Loeb Classical Library 191, Cambridge, MA, 1926.
- Livy, *History of Rome, Volume VI: Books 23-25*, trans. by F. G. Moore, Loeb Classical Library 355, Cambridge, MA, 1940.
- Livy, *History of Rome, Volume IX: Books 31-34*, trans. by J. C. Yardley, Introduction by Dexter Hoyos, Loeb Classical Library 295, Cambridge, MA, 2017.
- リウイウス著, 岩谷智訳 『ローマ建国以来の歴史2 — 伝承から歴史へ(2)』
京都大学学術出版会, 西洋古典叢書, 2016.
- リウイウス 『ローマ建国以来の歴史3 — イタリア半島の征服(1)』毛利晶訳,
京都大学学術出版会, 西洋古典叢書, 2008.
- リウイウス 『ローマ建国以来の歴史4 — イタリア半島の征服(2)』毛利晶訳,
京都大学学術出版会, 西洋古典叢書, 2014.

- リウウィウス『ローマ建国以来の歴史9 — 第二次マケドニア戦争, 東方諸戦役(1)』吉村忠典・小池和子訳, 京都大学学術出版会, 西洋古典叢書, 2012.
- McGing, B. 2010, *Polybius' Histories*, New York.
- Mallory, J. P. 1989, *In Search of the Indo-Europeans*, London.
- Mallory, J. P. and D. Q. Adams, 2006, *The Oxford Introduction to Proto-Indo-European and the Proto-Indo-European World*, Oxford.
- Mallory, J. P. 2013, 'The Indo-Europeanization of Atlantic Europe', in Koch, J. T. and Cunliffe, B (eds.), *Celtic from The West 2, Rethinking the Bronze Age and the Arrival of Indo-European in Atlantic Europe*, Oxford, pp. 17-39.
- Mallory, J. P. 2016, 'Archaeology and Language Shift in Atlantic Europe', in Koch, J. T. and Cunliffe, B. eds. 2016, *Celtic from The West 3, Atlantic Europe in the Metal Ages: Questions of Shared Language*, in collaboration with Kerri Cleary and Catriona D. Gibson, Oxford, pp. 387-407.
- Martin, R. H. 2009, 'From manuscript to print', in A. J. Woodman (ed.), *The Cambridge Companion to Tacitus*, pp. 241-252.
- Martial, *Epigrams*, Volume I: *Spectacles, Books 1-5*, ed. and trans. by D. R. Shackleton Bailey, Loeb Classical Library, 94. Cambridge, MA, 1993; *Volume II: Books 6-10*, ed. and trans. trans. by D. R. Shackleton Bailey, Loeb Classical Library 95, Cambridge, MA, 1993.
- Megaws, R. & V. 2001, *Celtic Art, from its beginnings to the Book of Kells*, London.
- Mellor, R. 2011, *Tacitus' Annals*, Oxford.
- Murphy, J. P. 1977, *Rufus Festus Avienus. Ora Maritima: or description of the seacoast (from Brittany round to Massilia)*, Chicago.
- 森野聡子・菱川英俊, 2017, 「黎明期のケルト学」『ケルティック・フォーラム』20, 5-16.
- 森野聡子, 2017, 「エドワード・スルウィッドにおける“島のケルト人”論再考」『ケルティック・フォーラム』20, 17-26.
- Nash, Daphne. 1976, 'Reconstructing Poseidonios' Celtic Ethnography: Some Considerations', *Britannia*, Vol. 7, pp. 111-126.
- Olalde, I. et al. 2018, 'The Beaker phenomenon and the genomic transformation of northwest Europe', *Nature*, 555, pp. 190-196.
- Olalde, I. et al. 2019, 'The genomic history of the Iberian Peninsula over the past 8000 years', *Science*, vol. 363, Issue 6432, pp. 1230-1234.

- Oppenheimer, S. 2006, *The Origins of the British: The new prehistory of Britain and Ireland from Ice-Age hunter gatherers to the Vikings as revealed by DNA analysis*, London.
- Oppenheimer, S. 2010, 'A Re-analysis of Multiple Prehistoric Immigrations to Britain and Ireland Aimed at Identifying the Celtic Contributions', in B. Cunliffe and J. T. Koch (eds.), *Celtic from the West: Alternative Perspectives from Archaeology, Genetics, Language and Literature*, Oxford, pp. 121-151.
- Pausanias, *Description of Greece, Volume I: Books 1-2 (Attica and Corinth)*, trans. by W. H. S. Jones, Loeb Classical Library 93, Cambridge, MA, 1918 ; パウサニアス著, 馬場恵二訳『ギリシア案内記 上』岩波文庫, 岩波書店, 1991.
- Pezron, Paul-Yves, 1703, *L'antiquité de la nation et la langue des Celtes, autrement appelez Gaulois*; Jones, D. 1706, *The Antiquities of Nations, more particularly of the Celtae or Gauls, taken to be originally the same people as our ancient Britains: containing great variety of historical, chronological, and etymological discoveries, many of them unknown both to the Greeks and Romans*.
- Plato, *Laws*, Volume I: Books 1-6, trans. by R. G. Bury, Loeb Classical Library 187, Cambridge, MA, 1926 ; プラトン著, 森進一ほか訳『法律 上』岩波書店(岩波文庫), 1993.
- Pliny the Elder, *Natural History, Volume II: Books 3-7*, trans. by H. Rackham, Loeb Classical Library 352, Cambridge, MA, 1942.
- Pliny the Elder, *Natural History, Volume VIII: Books 28-32*, trans. by W. H. S. Jones, Loeb Classical Library 418, Cambridge, MA, 1963 ; プリニウス著, 中野定雄ほか訳『プリニウスの博物誌 3』雄山閣, 1986.
- Pliny the Younger, *Letters Volume I: Books 1-7*, trans. by Betty Radice, Loeb Classical Library, 55. Cambridge, MA, 1969.
- Plot, R. 1677, *The natural history of Oxfordshire, being an essay toward the natural history of England, Oxford*.
- Plot, R. 1686, *The natural history of Staffordshire*, Oxford.
- Polybius, *The Histories, Volume I: Books 1-2*, trans. by W. R. Paton, rev. by F. W. Walbank and Ch. Habicht, Loeb Classical Library 128, Cambridge, MA, 2010 ; ポリュビオス著, 浪江良和訳『歴史 1』京都大学学術出版会, 西洋古典叢書, 2004.
- Powell, T. G. E. *The Celts*, 1958, 1980 (new edition), London; T. G. E.パウエル著,

- 笹田公明訳『ケルト人の世界』, 東京書籍, 1990.
- Quintilian, *The Orator's Education*, Volume I: Books 1-2, ed. and trans. by Donald A. Russell, Loeb Classical Library 124, Cambridge, MA, 2002; クインティリアヌス著, 森谷宇一訳『弁論家の教育1』京都大学学術出版会, 西洋古典叢書, 2005.
- Rankin, D. 1987, *Celts and the Classical World*, London.
- Reich, D. 2018a, *Who We Are and How We Got Here: Ancient DNA and the New Science of the Human Past*, Oxford; デイヴィッド・ライク著, 日向やよい訳『交雑する人類: 古代DNAが解き明かす新サピエンス史』NHK出版, 2018.
- Reich, D. 2018b, 'Ancient DNA Suggests Steppe Migrations Spread Indo-European Languages', *Proceedings of the American Philosophical Society*, Vol. 162, No. 1, MARCH 2018, pp. 39-55.
- Renfrew, C. 1987, *Archaeology and Language: The Puzzle of Indo-European Origins*, London; コリン・レンフルー著, 橋本慎矩訳『言葉の考古学』青土社, 1993.
- Renfrew, C. 2000 'Archaeogenetics: towards a population prehistory of Europe', in *Archaeogenetics: DNA and the Population Prehistory of Europe*, eds. By Renfrew, C. and Boyle, K, Cambridge, U. K. pp. 3-12.
- Renfrew, C. 2001, 'From molecular genetics to archaeogenetics', *Proceedings of the National Academy of Sciences*, Vol. 98-No. 9, pp. 4830-4832.
- Renfrew, C. 2013, 'Early Celtic in the West: The Indo-European Context', in J. T. Koch and B. Cunliffe (eds.), *Celtic From The West 2, Rethinking the Bronze Age and the Arrival of Indo-European in Atlantic Europe*, Oxford, pp. 207-217.
- Roberts, B. F. 2009, 'Edward Lhwyd (c.1660-1709): Folklorist', *Folklore* 120 (1), pp. 36-56.
- Roller, D. W. 2006, *Through the Pillars of Herakles, Greco-Roman Exploration of the Atlantic*, New York.
- Sidonius, *Letters: Books 3-9*, trans. by W. B. Anderson, Loeb Classical Library 420, Cambridge, MA, 1965.
- Sims-Williams, P. 1998, 'Celtomania and Celtoscepticism', *Cambrian Medieval Celtic Studies*, 36, pp. 1-35.
- Sims-Williams, P. 2006, *Ancient Celtic Place-Names in Europe and Asia Minor*, Publications of the Philological Society, 39, Oxford.

- Sims-Williams, P. 2012, 'Can't We Know, and What Could We Know? Language, Genetics and Archaeology in the Twenty-First Century', *Antiquaries Journal*, 92 (2012), pp. 427-49.
- Sims-Williams, P. 2013, 'Post-Celtoscepticism: A Personal View', in *Saltair Saíochta, Sanasaíochta agus Seanchais: A Festschrift for Gearóid Mac Eoin*, ed. by Dónaill Ó Baoill, Donncha ÓhAodha, and Nollaig Ó Muraile, Dublin, pp. 422-428.
- Sims-Williams, P. 2016, 'The location of the Celts according to Hecataeus, Herodotus, and other Greek writers', *Etudes celtiques* 42, pp. 7-32.
- Sims-Williams, P. 2017a, 'The Celtic Languages', in *The Indo-European Languages*, second edition, ed. by Mate Kapović, Abingdon, pp. 352-386.
- Sims-Williams, P. 2017b, 'The earliest Celtic ethnography', *Zeitschrift für celtische Philologie* 64, pp. 421-442.
- Silva, M. et al. 2019, 'Once Upon A Time in the West: The Archaeogenetics of Celtic Origins', in Koch, J. T. and Cunliffe, B. eds., *Exploring Celtic Origins*, pp. 154-191.
- Stephani Byzantii Ethnica*, Vol. 3, K-O, ed., by Billerbeck, M. Berlin, 2014.
- Strabo, *Geography, Volume II: Books 3-5*, trans. by Horace Leonard Jones, Loeb Classical Library 50, Cambridge, MA, 1923.
- Strabo, *Geography, Volume III: Books 6-7*, trans. by Horace Leonard Jones, Loeb Classical Library 182, Cambridge, MA, 1924 ; ストラボン著, 飯尾都人訳, 『ギリシア・ローマ世界地誌 全2巻』 龍溪書舎, 1994.
- Tacitus, *Agricola. Germania, Dialogue on Oratory*, trans. by M. Hutton, W. Peterson, Revised by R. M. Ogilvie, E. H. Warmington, Michael Winterbottom, Loeb Classical Library 35, Cambridge, MA, 1914.
- Tacitus, *Annals: Books 4-6*, trans. by John Jackson. Loeb Classical Library 312, Cambridge, MA, 1937 ; タキトゥス著, 国原吉之助訳『年代記 下』 pp.35-37.
- Tierney, J. J. 1960, 'The Celtic Ethnography of Posidonius', *Proceedings of the Royal Irish Academy: Archaeology, Culture, History, Literature*, vol. 60, pp. 189-275.
- Toher, M. 2009, 'Tacitus' Syme', in *The Cambridge Companion to Tacitus*, pp. 317-329.
- Tolkien, J. R. R. 1963, 'English and Welsh', in *Angles and Britons: O'Donnell Lectures*, pp. 1-41.

- トーマス・チャールズ・エドワーズ著, 常見信代監訳, 2010『オックスフォードブリテン諸島史2 ポスト・ローマ』慶応義塾大学出版会.
- 田中美穂, 2017「『ケルズの書』は「ケルト」美術の傑作か?—「ケルト」再考論の入門として—」『大分工業高等専門学校紀要』第54号, 平成29年11月, 1-6.
- 常見信代, 2002「スコットランドと『運命の石』: 中世における王国の統合と神話の役割(続)」『北海学園大学人文論集』21, 147-180.
- 常見信代, 2014「『ケルト教会』と復活祭論争」『北海学園大学人文論集』57, 1-87.
- 常見信代, 2015「アダムナーンの『聖コロンバ伝』を読む: 史料とその問題点」『年報新人文』12, 1-65.
- 常見信代, 2017「史料と解釈: スコットランド中世史研究の問題」『北海学園大学人文論集』62, 25-52.
- 泊次郎, 2018「古代DNAが解き明かす人類の祖先の系譜」UP, 47(11), 東京大学出版会, 42-47.
- Yale, E. 2016, *Sociable Knowledge: Natural History and the Nation in Early Modern Britain*, Philadelphia.
- Yeats, W. B. *The Celtic Twilight — Myth, Fantasy and Folklore* (1893初版): ウィリアム・バトラー・イェイツ (1990年版), 井村君江訳『ケルトの薄明』2002, ちくま文庫.